

『嘉吉物語』の形成

和田 英道

要 旨 嘉吉の乱は衝撃的な事件であつたためか、これを素材とした軍記は数多い。本稿の第一部は、嘉吉の乱関係の軍記を俯瞰するために、『国書総目録』を手掛りとして、各作品の諸本調査と作品相互間の関係を探つたものである。その結果、それらのうちのかなりの作品が、赤松氏関係者、中でも書写山関係者によつて書かれたか、または書写山内に伝わつた記録類を基に書かれたものであることを知つた。第二部は第一部で解説した諸作品中最も文学的な『嘉吉物語』を取上げて、それが如何に形成されたものであるかを究めようとした。その手掛りとして現存諸本を比較校合し、三類に類別した。そして、それらを検討した結果、第一類本と第二類本とが、より古態的な本文を有するという結論に達した。以上の考察を通して把え得た『嘉吉物語』の形成過程は、初めに記録的な軍記が成立し、それを基に第一類本と第二類本とが生まれ、そして第三類本が生まれたというものであつた。そして、その動態は赤松氏と不可分の関係を有した書写山内でのことであつたため、赤松氏擁護の主張を持った語り物的な軍記物語となつたのである。

序

応仁の乱が中世から近世に至る激動期の開始であったとすれば、嘉吉の乱はさしずめ応仁の乱の予兆であったといえるだろう。嘉吉の乱は、嘉吉元年（一四四二）六月二四日、播磨の守護赤松氏が足利第六代將軍義教を暗殺した事件に端を発する。この乱は同年九月、満祐以下の赤松氏一族が自害して終熄した。しかし、これを境に足利幕府は極度に弱体化し、盛り上がる社会意識を底流に下剋上の風潮が蔓延する。このような時代に求められたのは、武断の独裁者であつたろう。ところが、実際に將軍となつたのは、文の人義政であつた。父義教の非業の死を聞き、將軍家の弱体化を見た義政に残されていたのは、文の道だけであつた。しかし、その生き方が結果的には足利家を存続させ、日本文化の基調をなす東山文化を形成させることになつたのである。そのような時代の先驅となつた嘉吉の乱は、かかる意味で重要な事件であつたといえよう。

本稿では嘉吉の乱を素材とした総ての軍記を俯瞰しつつ、中で最も文学的な『嘉吉物語』の形成過程を究めようと思う。その端緒として、まず『国書総目録』（以下『総目録』と略称する）収載の嘉吉の乱関係の軍記から見ることにしたい。

第一部 嘉吉の乱関係軍記物語考

嘉吉の乱に関する軍記物語を『総目録』によって摘載すると、次のようになる。以下の略号のうち、**別**は別名、**角**は角書、**著**は著者、**成**は成立年時、**写**は写本、**版**は版本、**活**は活字本、**補**は第八巻補遺編から採入した意。所蔵者の略号は『総目録』の凡例参照。

- (1) 赤松記 一冊 **著**実祐抄**成**天正一八**写**内閣・旧彰考
 (2) 赤松記 一冊 **別**赤松伝記**著**定阿**成**天正一六**写**国会(鶯宿雜記の内)・島原・彰考(赤松再興記と合)**活**群書類従合戦

(3) 赤松記 一冊 **写**宮書・東大史料(播磨清水寺藏本写)(播磨永井良右衛門藏本写)・多和

(4) 赤松記↓嘉吉記

(5) 赤松軍記 **角**嘉吉**写**東大史料(播磨万宝智恵袋四五)

(6) 赤松家古記軍録 一冊 **写**姫路

(7) 赤松盛衰記 三卷三冊 **写**静嘉・東大史料(色川三郎兵衛藏本写)・竜野(二卷二冊)

(8) 赤松物語 一冊 **写**国会(異本)・宮書(一冊)(椿亭叢書四)・教大・東大・島原↓嘉吉乱記

(9) 赤松略記 一冊 **成**万治元**写**鶴舞・神宮

(10) 嘉吉記 一冊 **別**嘉吉記**写**早大・大分(碩田叢史の内)・鶴舞・神宮・尊経(寛文一二写)(赤松記を付す)・茶

図小笠原**活**群書類従合戦

(11) 嘉吉軍記 一冊 **別**赤松記・赤松嘉吉記・嘉吉記**成**寛文九刊**写**宮書(毫埃二三)・鶴舞**版**内閣・東博・京大・教

大・東北大狩野・秋田・岡山県・浅野・茶図成實・旧彰考

(12) 嘉吉物語↓嘉吉乱記

(13) 嘉吉乱記 一冊 (別) 嘉吉物語(写) 静嘉・東北大狩野・金沢市加越能・鶴舞・彰考・尊経(補) 金沢市加越能(寛文一二写) (活) 改定史籍集覧二三・続群書類従二〇輯上

二 嘉吉の乱関係軍記物語解題

次に、この『総目録』の記事に基いて調査し得たところを報告し、併せて若干の補正を行いたい。

まず、(1)の『赤松記』として二本記されているが、その中の内閣本は、徳川昭武藏本を明治一五年四月に修史館(和学講談所を改組した史料編輯国史校正局の後身)二級写字生柳井修三が書写し、同年五月五等掌記滝沢規道が校勘したものである(識語)。徳川昭武は明治元年一月に水戸徳川家を継ぎ、版籍奉還後は水戸藩知事の職に在り、明治四三年七月三日没した(『徳川諸家譜』第一巻)。ということは、徳川昭武藏本が旧彰考館本であつた可能性もあり、もしそうならば、内閣本は旧彰考館本の謄写本であるところから、旧彰考館本が焼失した現在、知られる唯一の本ということになる。この本は赤松家を再興した政則から貞俊に至る赤松家の系譜が付載されている(後補であろう)。その『赤松記』の卷末に、天正一七年(一五八九)八月、十妙上人長吏清浄心院僧正実祐(当時八五歳)が著した旨の本奥書があり、さらに貞享二年(一六八五)九月一九日、書写山十地坊藏本を播磨国広峰社司魚住左近雅範が書写架藏した旨の転写奥書が付されている(『総目録』が天正一八年成立とするのは誤り。なお、書写山円教寺は赤松氏がその有力な檀徒であつたため、赤松家に関する記録が豊富であつたらしい。実祐は『書写山円教寺長吏記』(姫路市史)史料編1所収。昭和四九年三月)により、第一〇六世の長吏であつたことが知られる。そこに八七歳で没とあり、一一二世長吏快任の記事に、「慶長二年十月当三実祐僧正七回忌ニ」云々とあるところから、没年は天正一九年(一五九一)、生年は逆算により永正二年(一五〇五)であつたことが知られる。また、続群書類従巻九九六所収の『十地坊過去帳』の奥書、「貞享二年秋九

月以書写山十地坊実祐僧正自筆之本写之実祐姓大河内氏天正十七年丑歳年八十五ニシテ書之云々」が、その経歴を伝えている。大河内氏は、『赤松盛衰記』によれば、赤松一家衆である。また、雅範については続群書類従卷一三六所収『赤松系図』一本に、『寛文二年秋七月中浣於書写山十地坊令書写也。播陽飾東郡広峰山村上源氏赤松系末魚住左近永栄軒 雅範^{花押}」の奥書がある。当時、赤松一家衆であり、広峰神社の社司でもあった魚住氏の末裔雅範は、盛んに赤松家に関する記録を求めていたようで、この『赤松記』もその一つであつたらしい。内閣本の前表紙見返しには墨書の貼付紙があり、この『赤松記』は(2)の項に掲げた『赤松記』の遺漏を補う別本であると注書されている。さらに端作りの上には、「比書赤松家播城録ト同シ所アリ」と朱書した貼付紙がある(ともに本文とは別筆。但し、前者貼付紙の結びが、「史料採用ノ時ハ別本二字ヲ冠スヘシ」とあるところから、修史館内で付された注記と思われる)。(1)と(2)の『赤松記』を比較すると、確かに同じ事件を扱いながらも趣きを異にしている。また、成立年も(2)が天正一六年八月、(1)が翌年八月であり、その間の隔りは丁度一年である。あるいは注記が示唆するように、両書は相補う関係なのかもしれない。ただ、『赤松家播城録』との関係は、この書の存在を確かめられないので詳かではない(『総目録』には同名の書はないが、近似するもので『赤松家播城記』という写本一冊がある。これは「記録」として類別されており、凌霄文庫へ大阪市東淀川区後藤捷一氏蔵)に宝暦九年へ一七五八へ写本一冊がある)。ただ、(1)の『赤松記』は(2)の『赤松記』よりも記録的であり、その点からすると、(1)の『赤松記』が多分記録的であつたと思われる『赤松家播城録』と同じ箇所があつたろうことは、充分に想像されるところである。この部分的に同じという点からすれば、(1)の『赤松記』は、(7)項に掲げた『赤松盛衰記』上巻第一話「赤松満祐嘉吉之乱」や東大史料編纂所蔵『嘉吉之記』、また鶴舞図書館蔵『赤松家嘉吉乱記』と似通っている。これは資料としたものが同じであつたとも考えられるが、やはり一方が他方を参看したと考える方が無難であろう。そして、その関係は、史料編纂所本『嘉吉之記』(原本は播磨国広峰山広峰ツギ蔵本)や鶴舞図書館本『赤松家嘉吉乱記』から、『赤松

記』や『赤松盛衰記』への流れと見るべきであろう。但し、このことについては、(7)の『赤松盛衰記』の項で詳述したい。

(2)項の『赤松記』は、群書類従巻三九三に収載されるものである。この書も赤松家の系譜を、その起りから奥書に記された天正一六年に近い時点まで略述したものであって、嘉吉の乱はその間に事件の一つとして点綴されているに過ぎない。管見に入った諸本中、最も書写年時の古い島原松平文庫蔵『赤松伝記』（江戸初期写。松平忠房の印記あり）は、「因幡守入道八十四歳 于時天正一六年八月吉日 定阿判」の本奥書を有しており、類従本は、「天正拾六年八月吉日 因幡守入道定阿判 八十四歳書之」の本奥書を有する（彰考館蔵本も同じ）。この『赤松記』は、恐らく定阿なる人物が群書類従巻三七四所収『嘉吉記』（10項で解説）などの資料を参酌して著したものであろう。というのは、両書にかなり共通する部分があるからである。

ところで、(1)を見、(2)を見て気がつくのは、両書の奇しき因縁である。奥書によれば、(2)は天正一六年八月に定阿が八四歳で著したもの、(1)はその丁度一年後の天正一七年八月に実祐が八五歳で著したものである。ということは、定阿と実祐は同年齢であり、ともに同じころ赤松家の歴史に関心を抱き、その結果よく似た著作をものしたということになる。当時としては稀なる高齢者が、同時点において同じ志向を持っていた事に興味を覚える。実祐については既述したが、定阿については彼自身の著した『赤松記』の中にその出自を窺う以外、術はない。それによれば、「我等家の初り前に申ことく權守則景の弟新大夫弟を得平三郎頼景と申是より初り」とか、「我等曾祖父因幡」「我等祖父則近」とか、あるいは「源三郎ちきやう分下され候我等親にて候官途は左衛門尉貞助と申候」（引用は島原本）のような記述があり、定阿が赤松氏の一族であったことが判明する（管見に入った限りの『赤松系図』に、彼や彼の父の名を見出せないのは、庶流に属していたからであろう）。このように、定阿と実祐は現存資料の範囲内では別人と判断されるが、しかし実祐が定阿の述作を見、その補遺的述作を著すのに一年の時日しか要さなかったということは、両者

の間がかなり近いものであったことを物語っている。

(3)項の『赤松記』のうち、多和文庫本のみは未見である。書陵部には「赤松記」の書名で三部所蔵されている。一本(函架番号二〇七―七八八。江戸末期写)は赤松則平書写の本奥書を有する『赤松之伝』であり、これについては後述する。一本(二〇七―九〇五。江戸末期写)は(2)項の定阿作『赤松記』であり、この項には該当しない。残る一本(二一五―三五)は寛文九年刊の『嘉吉軍記』であり、これについては(1)項で述べる。尾題に「赤松記」とあるため、このカードがあるのだろう。よって、書陵部にはこの項に該当する『赤松記』は存しない。史料編纂所にも二部所蔵される。そのうちの清水寺本とは播磨国加東郡平木村清水寺の架蔵本を、明治二十三年六月に修史局編修長重野安繹が影写したものである。内容は赤松円心の子で則祐の弟氏範が南朝方に与したために足利尊氏に攻められ、この清水寺で自害したことと記録であって、嘉吉の乱とは関係がない。永井良左衛門(『総目録』は「良右衛門」とするが、「右」は「左」の誤り)本は播磨国揖西郡平野村永井良左衛門蔵本を、明治二十三年一月重野安繹が謄写したものである。内容は第一章「村上天皇源氏赤松家先祖之事」、第二章「赤松白幡城主代々記」、第三章「赤松家中興」、第四章「赤松附城」、第五章「赤松一家衆」であるが、これは(7)項で述べる『赤松盛衰記』上巻の第二章から第六章に当たっている(上巻は全一四章)。詳細はその項に譲りたい。

(4)の『赤松記』は『嘉吉記』と同じ作品と見做されているが、管見の限りでは『嘉吉記』に「赤松記」という別名をもつ本は見当たらない。ただ、上述のように寛文九年版『嘉吉軍記』の尾題に「赤松記」とあり、この本を『嘉吉記』の一系統本と見たためかもしれない。しかし、後述するようにこの本は『嘉吉物語』の一系統本であり、群書類従巻第三七四所収の『嘉吉記』とは相違する。よって、この一項は削除し、代りに赤松則平書写奥書の『赤松之伝』が補入されるべきであろう。その『赤松之伝』は福住道祐の請いにより、万治元年(一六五八)八月赤松則平が書送ったものであ

る。則平自筆本は讃岐松平家の披雲閣文庫に所蔵されていたが、今次大戦により焼失した。転写本として尊経閣文庫蔵『赤松之伝』（万治元年頃の写。後述の『嘉吉記』と合綴）、無窮会図書館蔵天淵文庫『赤松之伝』（江戸中期初めの写か。後述の『嘉吉記』と合綴）、加賀市立図書館蔵聖藩文庫『赤松家伝』（江戸末期写。後述の『嘉吉記』と合綴）、書陵部蔵『赤松記』（二〇七―七八八。江戸末期写）、聖藩文庫蔵『赤松之伝』（古戦記―二五三。江戸末期写。題簽へ別筆）は「赤松伝記」の五本が管見に入った。なお、本書については近く別稿で触れる予定なので、本稿では詳述しない。

(5)項の『赤松軍記』は『播陽万宝智恵袋』四五の六に『嘉吉軍記』（寛文九年版の転写本）とともに併載されるものである。題名は「嘉吉赤松軍記考」で、五丁ほどの短い記録である。末尾に、「嘉吉の軍記世上にありといへとも違ひたる事多し依て今古書を考へ誤を正して後覽の爲めと記し侍る也 宝曆四戌年二月廿六日 三木好古斎記」の本奥書があり、執筆の動機が示されている。寛文九年版の『嘉吉軍記』の誤謬を正そうとしたもののようであるが、その意図は完全には果されていない。執筆者の三木好古斎については詳かではないが、赤松氏の家臣三木氏の後裔であろう。

(6)項の『赤松家古記軍録』は姫路市立図書館蔵とあるが、同館には所蔵の記録はなく、実地調査しても現物は確認できなかった。現在、不明というべきである。

(7)項の『赤松盛衰記』は現存する赤松家関係の軍記としては最大のもので、現在、三本の存在が確認されている。しかし、史料編纂所蔵本（二〇四〇・四一九四）は明治二〇年二月に色川三中蔵本を編纂所側で謄写したものであり、その後色川本は静嘉堂文庫の所蔵となった。だから静嘉堂文庫本と史料編纂所本とは本文的に同じことになる。その静嘉堂文庫本（七三―一五）は三卷三冊、下巻卷末に、「赤松盛衰記三卷以備前人萩原広道伝借本嘉永二年正月写之 藤原直臣」という朱書奥

書がある。残る一本は赤松氏の本拠地であつた兵庫県竜野市の市立図書館に所蔵される二卷二冊本である(歴史科学の部七)。これは地元の儒学者股野充美(同館所蔵『赤松系図』は延享四年充美写)の子孫から同館へ寄贈されたものという。奥書などがないので書写年時は明確ではないが、文中に注書として天川友親の宝暦年間(一七五一―一七六四)の言説を用いているので、それ以後の書写であることは確かである(天川友親は地元の好事家で、喬木堂と号した。『播陽万宝智恵袋』にも彼の著作物が収載されている)。この静嘉堂本の上巻・下巻と、竜野本のそれとは完全に一致している。一方、上・下巻が有する目録を中巻は有しておらず、形式上も相違している。ということは、静嘉堂本の中巻は独自の編集ということになるが、これは後述する点から、増補されたものらしい。すなわち、二巻本と三巻本との形態では、前者が古態を有するものと思われる。

さて、静嘉堂本の中巻には、所々に年号の異なる本奥書が付されている。まず、第一章「赤松嘉吉年間録」の末尾(四三丁裏)に、「右嘉吉年間録者其古白国氏所著述也或人之雖為秘書予所望之而借請令書写者也 安永二癸巳^一 曆八月吉日喬木堂友親」とあり、さらに第二章「村上源氏赤松家先祖之事」の末尾(五八丁表)に、「右之記者村上源氏赤松家先祖之事而從赤松円心到則房都合十代也歳月移后于時天正十二^一 甲申^二 歳秋八月吉日書記之全私意可備後覽也後藤休閑入誌」の本奥書、この後一行あけ一字下げで、「右比記者後藤氏一卷求^一旧書^二考^三前後全令書写者也更無異心最可秘者也 于時寛文十一^一 辛亥^二 年九月中脞 広峰山魚住栄永軒豊範書記矣」の転写奥書が記されている。その他、同巻に付載された「赤松諸士判鑑目録」の序文(六一丁表)、「天正ノ比赤松家ノ祐筆嵯峨山民部赤松從士判盡ト云書所持ス民部祐筆役ヲ勤シ故書状古證文等ニ在ル処ノ判形書写シ三冊アリ此比芦屋道海彼家ニ至リ是ヲ一覽シ少々書写シケルト巡考聞書ニ見エタリ 嵯峨山氏ハ完栗郡嵯峨邑住嵯峨山右衛門佐一族置城主ノ祐筆也嵯峨山一如ト云モノ赤松諸家座列見嵯峨山一如子民部可成右三冊之書今尋而無之三木氏伝来之一冊写之者也 于時安永第二癸巳^一 年十二月書之」や跋文(省略)も

その一つであろう。これらの奥書や跋文により、中巻の各章段はそれぞれ個別的に成立したことが知られるのである。

因みにいうと、中巻は第一章「赤松嘉吉年間録」・第二章「村上源氏赤松家先祖之事」・第三章「赤松諸士判鑑目録」の三章からなる。このうち、第一章は上巻の第一章「赤松満祐嘉吉之乱」に近似しており、第二章は同じく上巻の第二章「村上源氏赤松家先祖之事」と同名であり、内容的にも同じ事柄を述べている。しかし、上巻のそれとは異文であり、寧ろ(3)項で述べた史料編纂所蔵永井良左衛門本『赤松記』の第一章「村上天皇源氏赤松家先祖之事」と同系統本である。また、第三章は『播陽万宝智恵袋』四三巻第一章「播州巡考聞書」と同じ本から採用したものらしいが、ただ『赤松盛衰記』がほとんど赤松家一族の花押を収載しているのに対して、『智恵袋』の方は赤松家の家臣のそれである(『播州巡考聞書』の跋文、「此頃赤松従家判盡と云書三冊有を見たりしに早宅ゆへ少々うしける嵯峨山民部か方にて見侍りし」)によって、これが『赤松盛衰記』所収「赤松諸士判鑑目録」と同じ本に依拠していることが判る。こうして見ると、中巻は上巻に収載されたものの異本や、あるいは遺漏を補ったものと思われる。

中巻が何時、誰の手によって成ったものか、明確ではない。しかし、中巻全三章のうち、二章までが安永二年(一七七三)の奥書を有するところからすれば、それよりさ程遠くない時期に編纂されたものと思われる。また、前掲した序文や奥書に見える「後藤氏」や「白国氏」、あるいは「魚住氏」はいずれも赤松氏の有力な家臣であり、それらの家々に伝えられた記録類を比較的簡単に見ることのできた人物の手に成ったことも、想像に難くない。あるいは、安永二年の奥書を書いた喬木堂天川友親が擬せられるかもしれない。彼はそのころ盛んに播磨国内の記録類を求めては、述作していたからである。しかし、固より断定はできない。

これまで、後世増補されたと考えられる中巻について検討してきたが、この中巻の成立事情は、上巻・下巻にも当てはまると思われる。というのは、そこに収載された各章段と同系統の本が、独立して各地に散在するからである。

まず、上巻の第一章「赤松満祐嘉吉之乱」は、既述のとおり中巻の第一章と同内容であり、また似た文脈もある。しかし、この場合は中巻の方が上巻の異本・遺漏の補充を図ったと思われる、しかも部分的に依拠した資料が重なり合った程度の似方であった。ところが、鶴舞図書館蔵『^{赤松家}嘉吉乱記』（河カ一三六。江戸中期の末頃写）や史料編纂所蔵『嘉吉之記』（二〇四〇・四一四二）は、上巻の第一章と同種の作品である（鶴舞本は河村家田蔵本。史料編纂所本は播磨国飾東郡広峯山広峯ツギ蔵本を、明治二二年一〇月編修長重野安禪が謄写したもの。広峯氏は広峯神社祠官の家系）。ただ、鶴舞本と史料編纂所本とは語句や内容（叙述の順序の違いも含む）にかなりの異同が見られ、また両者はそれぞれに誤字・誤脱を有するところから、親子関係のような縦の関係をなすものではなく、別系統に属するものと判断される。では、「赤松満祐嘉吉之乱」は、どちらの系統の本であろうか。三本を比較した結果からいうと、叙述の展開において一ヶ所だけ順序が前後しているものの、大体において鶴舞本と同じである。この「赤松満祐嘉吉之乱」と鶴舞本とは、どちらがより古態であるのか、俄には判定し難い。両者の違いは細かい語句の異同を別にとすると、冒頭部の違いと文末の話の順序が逆になっていることの二点である。すなわち、「赤松満祐嘉吉之乱」の冒頭が、「夫レ人皇六十二代村上天皇第七之皇子具平親王六代之末孫」云々のように赤松家の系譜で始まるのに対して、鶴舞本は、「赤松左京太夫満祐入道性具去ル永享ノ始ヨリ依^テ違^ニ上意^{ルニ}」云々で始まっている（「赤松満祐嘉吉之乱」は系譜を述べたのち、「去ル永享ノ始依^レ違^ニ上意^ト」と、鶴舞本と同じ文章になる。なお、冒頭部に関しては史料編纂所本と鶴舞本は同じ）。また、文末の場合、「赤松満祐嘉吉之乱」は、満祐の弟左馬助則繁の朝鮮逃亡、文安五年（一四四八）再び帰朝して筑紫で誅される話（史料編纂所本は誅された場所を明記していない）、次に満祐の嫡男彦次郎教康が伊勢の国司を頼って逃れ、嘉吉元年九月に同国で自害、閏九月二日京都注送の話が続いているが、鶴舞本はこれが逆である。これら二点の違いのうち、冒頭部の系譜の叙述は、軍記ものの語り出しの常套的手法である。その有無によって新旧を識別する

のは、危険かも知れない。しかし、史料編纂所本と鶴舞本の両者にこれがないこと、また本来存在した系譜の記事を後に省く必然性がなく、本来存在していなかったその記事を後に増補したと考える方が無理のない解釈のように思われる。また、「赤松満祐嘉吉之乱」も鶴舞本も時間の流れに沿った記事展開であるところから、嘉吉元年の記事が先で、文安五年の記事が後に配置されている鶴舞本の方が、本来的な記事展開のようである。こうして見ると、鶴舞本の方が「赤松満祐嘉吉之乱」よりも古態的であるということになる。すなわち、『赤松盛衰記』第一章「赤松満祐嘉吉之乱」は、鶴舞図書館蔵^{家^{赤松}}嘉吉乱記』系統本を収載したものと思われる。

(3)項でも触れたが、史料編纂所蔵永井良左衛門本「赤松記」は、全五章から成る。しかし、そのどれもが『赤松盛衰記』上巻に収載されるものである。特に第一章「村上天皇源氏赤松家先祖之事」から第三章「赤松家中興」までは、体裁・内容ともに『赤松盛衰記』の第一章から第三章までとほとんど変わらない。これらのうちで最新の記事は、天正年間に赤松氏の一族宇野新太夫為則が秀吉によって滅ぼされた第四章「赤松附城」の記事である。このため第四章が天正以後に書かれたことは疑いないが、他の章が何時の成立であるのか詳かではない。また、上巻第七章「城山籠城宗徒」は、『播陽万宝智恵袋』四六の一「赤松家伝袖ノ記」中の「城山籠城八十八人覚書嘉吉元年」と同じものである。但し、前者の記事が詳密である。「赤松家伝袖ノ記」の跋文として、「比記は赤松家のあらましを大略して述神^(巫カ)社の坐を次てに載て以て赤松の袖の記とはいふへかりける 岡村道雪」とある。その他、史料編纂所蔵『赤松播城録』にも、「赤松満祐嘉吉之乱」や「赤松白播城主代々記」と同種の記事が収められている。

第八章以後、上巻の記事は赤松氏の家臣や城郭図・領地にまで及んでいる。このように上巻一つをとりあげてみても、その中には物語の記事から城主や家臣団の名前を連ねた名簿、あるいは城郭図などが混在しており、それらは決して他の章節と関わり合うものではない。下巻は嘉吉の乱で衰微した赤松家を再興した赤松政則関係の記事が主で、

全三章、付録として七章が付加されている。この巻は特に『応仁記』との関係が注目されるが、後稿を期したい。

以上のことから、『赤松盛衰記』の形成過程は、かなり明確になったと思われる。それは赤松家に関わりを持つ者が、目で見、耳で聞いたものの記録をさらに集めたものであり、その史実性はかなり高いということができよう。

因みに高坂好氏(昭和四十六年没)は、『公名公記』に記された赤松氏追討の論旨が『赤松盛衰記』にのみあることを拠り所として、『私はこの『赤松盛衰記』こそもつとも史実をふまえた軍記物と信じている』と述べている(人物叢書『赤松円心・満祐』P.237 昭和四五年三月 吉川弘文館。この論旨は上巻第一章「赤松満祐嘉吉之乱」に採用されている。既述した鶴舞図書館蔵^{赤松家}『嘉吉之乱』や史料編纂所蔵『嘉吉之記』にもあるが、高坂氏は恐らくこれを見ていなかったであろう)。「赤松盛衰記」は赤松氏を研究する場合、注目すべき作品といえるであろう。

なお、序でに触れると、静嘉堂文庫に『参考赤松盛衰記』という五巻三冊本が所蔵されている(七三一・一六。江戸末期写)。しかし、この本は前述の『赤松盛衰記』とは全くの別本で、政則以後の赤松氏関係の記録である。ただ、書体から推して、『赤松盛衰記』の中巻・下巻と『参考赤松盛衰記』の巻一―五までは同筆である。『参考赤松盛衰記』は、あるいは『赤松盛衰記』を書き継ぐ意味で書かれたものかも知れない。

(8)項の『赤松物語』は、実は(12)項の『嘉吉物語』の一系統本である。この本については後述するので、ここでは触れない。ただ、国会図書館蔵本に「異本」の注書があるが、普通の『赤松物語』である。『総目録』掲載分以外で管見に入っただもののうち、題名が『赤松物語』であるものを挙げると、松浦史料博物館蔵本・聖藩文庫蔵本の二本がある。(9)項の『赤松略記』は、『嘉吉物語』と同種の作品である。そのことは事件展開が『嘉吉物語』と完全に一致すること、照応する記事に同じ語彙もしくは似た表現を採っていること、それに例えば、「若党三百八十九騎都合其勢七百余人」のように、細かい数字までが完全に一致することなどによって確認できよう。一体、この二本は如何なる関係

を有するものなのか。ところで、二本の相違する点は語句・表現の違いを除くと、その書名にふさわしく『赤松略記』の記述が簡単なことである。但し、この場合の簡単は簡潔の謂ではなく、寧ろ粗略の意味に近い。内容の点からも、また書名の点からも『赤松物語』を簡略に記した可能性が強い。また、『赤松物語』が赤松家の、特に満祐擁護の姿勢が濃厚であるのに対して、『赤松略記』は、「(満祐が)忽ニ野心ヲサシハサ」んで義教を謀殺したとか、嫡男教康を「逆意無道之者ノ子」と呼び、その自害を「天罪コ、ニキハマリテ」と痛罵する。作品全般は赤松家擁護の筆致であるため、『赤松略記』はその内部に対立する二つの主張を含むことになったのである。間違いなく赤松家批判の方が後から補入されたものであろう。このような内部分裂は、後述する寛文九年版『嘉吉軍記』や東京教育大学附属図書館蔵『赤松物語』に付された伊勢貞丈の跋文(一一七頁参照)などの内包するものと同質である。それは原作者が苦心して創始した逆臣赤松家擁護の心を顧みようとしない後世の、恐らくは幕藩体制の枠内に居た者による改変であつたのだろう。鶴舞図書館蔵『赤松略記』(河カー三四、河村秀頼旧蔵本。江戸中期写。『嘉吉記』・『上月記』と合綴)の本奥書は、万治元年(一六五八)三月五日の書写年時を示しているから、それ以前の成立であることは確かである(神宮文庫本は未見であるが、目録には「万治元年写」とある)。とすれば、寛文版本との成立の間隔は、少くとも十年余りの差があることになるが、しかし両者には確かな共通点がある。それは忠君・奉公という、時の流れとともに固まっていく思想の反映であつたと思われる。なお、『赤松略記』の結句、「何者ノシハサニヤ 御所様乃ケフリト成ラセタマヒシモタタ赤松オフスヘシカ故」は、既述した鶴舞図書館蔵^{家赤松}『嘉吉乱記』や『赤松盛衰記』第一章「赤松満祐嘉吉之記」の「落書二 普光院三ノ煙トナルコトモ彼ノ赤松ヲフスヘシカユエ」の結句と相通じるものがある。前者が後者を参酌したか、またはこのような落首が巷間に伝えられていたのであろう。

(10) 項の『嘉吉記』は、群書類従卷三七四に収載されている。この項に挙げられた諸本中、まず大分県立図書館蔵本

は後補の題簽では「嘉吉記」となっているが、内題などはなく原題は不明である。内容は「嘉吉物語」そのものであり、この項には該当しない。また、尊経閣文庫本としてあげられた二本のうち、寛文一二年写本は現在金沢市立図書館蔵加越能文庫に収められている。題簽は「嘉吉記」、内題は「嘉吉乱記」である。(13)項の「嘉吉乱記」の補遺として挙げているのがこの本である。もう一方の『赤松之伝』（「赤松記」は誤り）を付した本は、題名は「嘉吉記」だが、内容は「嘉吉物語」である。なお、この系統本は(4)の『赤松記』の項で触れたように、他に無窮会図書館(天淵文庫)と加賀市立図書館(聖藩文庫)の二ヶ所に所蔵されている。以上については第二部で詳述する。(10)項の最後に挙げられているお茶の水図書館蔵小笠原文庫『嘉吉記』は、後補された題簽は「嘉吉記」であるが、その下に打付書きで「大弓」とあるのが正しい。これは嘉吉年間に行われた犬追物の記録で、併せて犬追物に関する作法が一つ書きで書かれている。本項の『嘉吉記』とは全くの別物で、削除すべきである。以上に触れずに残った早稲田大学附属図書館蔵井上頼圀旧蔵本(リ五―一七五五、江戸末期写)、鶴舞図書館蔵河村秀頼旧蔵本(既述した『赤松略記』・『上月記』と合綴)、神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本(八五六、江戸中期写)の三本がこの項に該当するものである。その他、新たに付け加えるものとしては、聖藩文庫本(古戦記二四九、江戸末期写)、東京大学附属図書館蔵南葵文庫本(G二四―五七二・慶応二年写。『応永記』と合綴)などがある。しかし、この本はこれだけではなく、まだ各地に散在しているようである。

(11)項の『嘉吉軍記』は、寛文九年(一六六九)一二月に吉田四郎右衛門が版行したもので、同年二月付けの中橋道室(寿成)の序が付されている。内容的には『嘉吉物語』の一本であるが、書名は題簽が「赤松嘉吉軍記」、序文では「嘉吉軍記」、柱記が「嘉吉記」、尾題が「赤松記」のように四通りである。これは当時、『嘉吉物語』の題名が一致していなかったことを物語るものであろう。管見の限りではこの本には紺表紙と浅葱色表紙の二種があり、形状・刷り具合

によって後者の方が後刷りのようである。この浅葱色表紙本は、今のところ聖藩文庫に一部あるだけである（同文庫には二部存するが、函架番号は同じ）。前者の紺表紙本も大きさにおいて縦横各八ミリの範囲内で異っているが、管見に入った限りでは東北大学附属図書館蔵狩野文庫本が最大で、しかも刷りが良い。版本として新たに付加えるものとしては、前述した聖藩文庫の二本のほか、函館市立図書館に一本、それに筆者も一本架蔵している。この本については、第二部で解説したい。

なお、写本として挙っている二本のうち、鶴舞図書館本は版本の転写本だが、途中一一丁表から一二丁裏にかけて錯簡がある。一方の書陵部本は毫埃叢書卷二三に収載された二丁裏に渡る記録である。この巻には全部で七話が収められているが、その裏表紙見返しに二枚の貼付紙があるだけで、序跋奥書などはない。貼付紙の一枚には明治一七年七月九日の識語と佐々木勝の署名捺印、もう一枚には明治一七年八月七日校合済みの識語と加藤喜三郎の署名捺印がある。内容は嘉吉元年六月の乱勃発時と、九月に赤松満祐が自害した乱の終焉期を叙したものである。また、「播陽万宝智恵袋」四五の六収載の『嘉吉軍記』も、版本からの転写である。

(12)項の『嘉吉物語』は、見よ項目として『嘉吉乱記』に分類されている。確かに両者は同種であるが、しかし系統を異にしているところから、別項を立てるのが妥当であろう。なお、続群書類従本の尾題に「嘉吉乱記」とあるが、これは内題の「嘉吉物語」とともに後の書入（別筆）である。この項に分類されるものは、書陵部蔵続群書類従原本・静嘉堂文庫蔵中山信名自筆本・改定史籍集覧本（底本不明）の三本である。詳細は第二部に譲る。

(13)項の『嘉吉乱記』は、『嘉吉物語』の異本である。本系統の諸本についても第二部で詳述する。但し、静嘉堂文庫本は(12)項に挙げた中山信名自筆本、尊経閣文庫本は補遺として挙げた金沢市立図書館蔵寛文一二年写本のことである（だから同館には二本所蔵される）。また、鶴舞本は(7)項で言及した『赤松家嘉吉乱記』のことであり、これは史料編纂所

蔵『嘉吉之記』とともに別項を立てるべきである。また、東北大学附属図書館蔵狩野文庫本は題簽・内題・尾題(三者一筆。本文とは別筆)ともに「嘉吉乱記」とするが、内容的には『嘉吉物語』である。活字本として改定史籍集覧や続群書類従に収載された形になっているが、そこに収められているのは(12)項の『嘉吉物語』であって、この系統本ではない。なお、この項に新たに付け加える本としては、聖藩文庫本がある。

三 嘉吉の乱関係軍記物語総覧補正

前項の解説に基き嘉吉の乱に関する軍記物語を整理すると、次のようになる(書式はすべて第一項の一覧表に拠る。但し、⑩は調査による追加本)。

- (1) 赤松記 一冊 ⑦著実祐成⑧天正一七⑨内閣・旧彰考
 - (2) 赤松記 一冊 ⑧別赤松伝記⑦定阿⑧天正一六⑨国会(黨宿雜記の内)・島原・彰考(赤松再興記と合)⑩追宮書
 - (3) 赤松記 一冊 ⑨写東大 史料(播磨清水寺藏本写)・多和
 - (4) 赤松之伝 一冊 ⑦著赤松則平⑧万治元⑨旧披雲閣文庫・尊経(嘉吉記と合)・無窮^{天淵}(嘉吉記と合)・加賀^{聖藩}(嘉吉記と合)(一冊)・宮書(赤松記)
 - (5) 赤松軍記 ⑧嘉吉⑦著三木好古⑧宝暦四⑨写東大 史料(播陽万宝智恵袋四五)
 - (6) 赤松盛衰記 三卷三冊 ⑨写静嘉(色川三郎兵衛旧藏本)・東大 史料(色川三郎兵衛藏本写)・竜野(二卷二冊)⑩東大史料(播磨永井良左衛門藏本写。書名は赤松記一卷一冊)
 - (7) 赤松物語 一冊 ⑨国会・宮書(一冊)(椿亭叢書四)・教大・東大・島原⑩松浦史料博物館・加賀^{聖藩}・東北大^{狩野}
- (嘉吉乱記)

- (8) 赤松略記 一冊 ⑤(成)万治元以前⑤(写)鶴舞(嘉吉記・上月記と合)・神宮
- (9) 嘉吉記 一冊 ⑤(写)早大・鶴舞(赤松略記・上月記と合)・神宮⑤(追)加賀^{聖藩}・東大⑤(活)群書類従^{合戦}
- (10) 嘉吉記 一冊 ⑤(写)尊経(赤松之伝と合)・無窮^{天淵}(赤松之伝と合)・大分(碩田叢史)⑤(追)加賀^{聖藩}(赤松家伝と合)
- (11) 嘉吉軍記 一冊 ⑤(角)赤松⑤(成)寛文九刊⑤(写)鶴舞・東大^{史料}(播陽万宝智恵袋四五)⑤(版)内閣・東博・京大・教大・東北
大狩野・秋田・岡山県・広島中央・茶臼^{成資}・旧彰考⑤(追)加賀(二部)・函館・松浦史料・筆者架蔵
- (12) 嘉吉之記 一冊 ⑤(写)東大^{史料}(播磨広峯ツギ蔵本写)・鶴舞^(赤松家)嘉吉乱記) ※『赤松盛衰記』上巻所収「赤松満祐
嘉吉之乱」はこの本

- (13) 嘉吉物語 一冊 ⑤(写)宮書(続類従原本)・静嘉⑤(活)改定史籍集覧^{一三}・続群書類従^{二〇上}
- (14) 嘉吉乱記 一冊 ⑤(写)金沢市^{加越能}(一冊)(寛文一二写)・彰考⑤(追)加賀^{聖藩}
- 嘉吉の乱に関する記録は、恐らくこれに数倍するものであつたろう。そして、その多くは散佚してしまつたと思われる。また、現存しながらも、確認し得ないものも多いことであろう。追々補綴して行きたいと考えるので、大方の御教示を得られれば幸いである。

第二部 『嘉吉物語』諸本考

一 『嘉吉物語』諸本の書誌

第一部で解説した嘉吉の乱関係軍記物語のうち、文学的に問題になるのは『嘉吉物語』と『嘉吉之記』である。両書は文学の立場からだけではなく、歴史学の方からも強い関心が寄せられている。例えば、高坂好氏は次のように述

べる。

嘉吉の乱を大きく取り扱った軍記ものに、『嘉吉物語』(統群書類従 合戦部)、『嘉吉記』(群書類従 合戦部)、『赤松記』(群書類従 合戦部)などがある。このうち『嘉吉物語』は、この乱をもっとも詳しく軍記物語として書いたもので、登場する人の名なども当時の記録と比較してみると誤りも比較的少ない。ところが、もともと戯曲的な軍記物であるから、(中略)かなりの潤色がみられる。

『嘉吉記』は、嘉吉の乱を中心として、前後赤松氏の歴史を叙したものであるが、比較的后世に書かれたものか、この事件に関係した武将の官職・姓名がでたらめなら、赤松氏でも中心人物の教康を祐之(教祐の誤り—和田注)と書くような始末で、どうい史料として利用することはできない。

これに反して、これまで刊行もされなかった『赤松盛衰記』のこの事変を叙した部分(上巻巻頭の「赤松満祐(嘉吉之乱」と題するもの)は、前述したように至って正確な記録なのである。満祐の書状のところでも触れたが、この『赤松治爵の編旨』(「公名公記」に収載——和田注)を掲載しているのもこの本だけである。(中略)兵庫の庫御所の戦、井原御所冬氏の擁立の記載とあわせてこの治爵編旨が記されていることによって、私はこの『赤松盛衰記』こそもっとも史実をふまえた軍記物と信じている(静嘉堂文庫史料編纂所にも写本)。(高坂氏前掲書 pp. 236—237)

既述したことが、高坂氏のいう『赤松盛衰記』上巻第一章『赤松満祐嘉吉之乱』は、史料編纂所蔵『嘉吉之記』や鶴舞図書館蔵『赤松嘉吉乱記』と同類の作品である。この『嘉吉之記』三本に関しては、いずれ機会を得て発表したと考えているので第一部の解説に留め、本稿では『嘉吉物語』について論ずることにする。

『嘉吉物語』の系類に属する諸本は、第一部三項の表に即していえば、(7)の『赤松物語』系諸本、(10)の『嘉吉記』系諸本、(11)の『嘉吉軍記』、(13)の『嘉吉物語』系諸本、(14)の『嘉吉乱記』系諸本、それに『嘉吉物語』を抄出したと思わ

れる(8)の『赤松略記』二本を加えれば、六系統二四本である。以下、これら諸本の相互関係について考察する。まず、諸本の書誌を記す。記載事項は、①函架番号②外題③内題④表紙⑤寸法(タテ×ヨコ、単位センチ)⑥装丁⑦本文料紙⑧紙数⑨一面行数⑩書入・ミセケチ⑪序・跋・奥書⑫蔵書印⑬その他。なお、酒井文庫本が二巻一冊のほかは、すべて一巻一冊、見返しは本文料紙と同じ。また、特に断らない限り「同筆」「別筆」は本文に対してである。

(一) 福井県小浜市立図書館蔵酒井文庫『嘉吉記』 江戸中期写

①なし②左端上方に打付書「嘉吉記」(別筆)③⑧前扉紙(原表紙か)「嘉吉記卷上」⑥上巻末尾「嘉吉記卷之上」、④下巻扉書と④巻末「嘉吉記卷下」(⑤は本文と同筆、他は別筆。但し、④と④は同筆)④柿色無地紙表紙⑤ 30×26 ⑥袋綴⑦楮紙(上・下巻とも同じ)⑧扉書2、本文墨付28、計30丁⑨上巻一丁表のみ8行、他の上巻・下巻は9行⑩なし⑪奥書(別筆)「右嘉吉記古写本御池通堀川東江入道具屋反故之中ヲ撰出候付表紙附置為所蔵者也 嘉永三年庚戌正月 山田吉令」⑫一丁表扉書下「毛呂山田之印」、二九丁裏左下隅「山田氏所蔵」(両者朱方形陽刻印)⑬上巻漢字平仮名交り、下巻漢字片仮名交り表記。上・下巻別筆。但し、両巻は同系統本の取合せ。酒井文庫本とは小浜藩主酒井侯の蔵書を主とし、中に家臣のものも含む。山田吉令は酒井家の右筆、山田家は寛永十一年酒井家が武蔵川越より移封されて以来の譜代の臣(小浜市立図書館司書小幡昭八郎市の御教示による)。印記に「毛呂山田之印」とあるのは、先祖が川越郊外の毛呂に居住したためか。なお、本書は『軍記と語り物』第一一号(昭和四九年一〇月)に翻刻した。

(二) 尊経閣文庫蔵『嘉吉記』 江戸初期写

①一―一八二―五〇②左端上方に打付書「嘉吉記」赤松伝付③各巻頭に「嘉吉記」「赤松之伝」④浅葱色無地紙表紙⑤ 26.6×19.1 ⑥袋綴(五つ目綴)⑦鳥の子紙⑧遊紙首1尾1、本文墨付『嘉吉記』21、『赤松之伝』13丁⑨9行⑩墨書入

と朱引は同筆、朱書入は別筆①『赤松之伝』の末尾に奥書(同筆)「福住氏道祐者^子旧相識也万治元^{戊戌}秋八月強而被求赤松伝記之実説不得黙止而写当家之伝記卷第十五之大略而以送之誠每覽昔人興衰由感慨係之矣後之視今亦猶今之視昔悲夫則繫入道八代之余裔赤松次郎兵衛尉源則平書焉」⑫一丁表右端上方に「学」(朱円形陽刻印)、右端下に「石川泉觀光博物館圖書室之印」(朱方形陽刻印)⑬漢字片仮名交り表記。一筆。『嘉吉記』(前)と『赤松之伝』(後)の合綴本。

〔三〕 無窮会図書館蔵天淵文庫『嘉吉記』 江戸中期写

①一八七一—②左端上方に墨子持梓白斐紙題簽(後付)「臨池堂叢書^{赤松之伝}」(両者別筆)。余白に「嘉吉記万治元年跋のペン書きあり(他の題簽内文字と別筆)③各巻頭に「赤松之伝」「嘉吉記」④芥子色無地紙表紙⑤ 29×21.8 ⑥袋綴⑦裴楮混漉⑧遊紙なし、「赤松之伝」10、「嘉吉記」18丁⑨10行⑩なし⑪『赤松之伝』の末尾に奥書(同筆)(二)の尊経閣本奥書と同じ。但し、「送」に「ソウ」の振仮名なし⑫一丁表右端上方より、「臨池堂文庫二百三」(朱文字のみ)・「鶴坂図書」(朱方形陰刻印)・「臨池堂文庫」・「松平氏蔵書記」・「無窮会神習文庫」(以上、朱方形陽刻印)、また昭和三四年漢学者加藤天淵が無窮会に寄贈した旨の桃色円形の陽刻印、さらに巻末左下隅に「鶴坂栄太郎」の青色陽刻印あり⑬漢字片仮名交り表記。一筆。川越藩主松平齋典旧蔵本。『天淵文庫目録』によれば、臨池堂叢書とは鶴坂栄太郎輯の由。

〔四〕 石川県加賀市立図書館蔵聖藩文庫『嘉吉記』 江戸末期写

①二五四②左端上方に黄色無地題簽「赤松家伝全」③各巻頭に「赤松家伝」「嘉吉記」④浅葱色地に茶色の亀甲紋と花模様入紙表紙⑤ 27.0×19.4 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙首1尾0、本文は「赤松家伝」18、「嘉吉記」33丁⑨8行⑩墨書入あり(同筆)⑪『赤松家伝』の末尾に奥書(同筆)。(二)の尊経閣本奥書と同じ。但し、「送」に「ソウ」の振仮名なし

し⑫一丁表右上隅「錦城小学校印」(朱方形陽刻印)⑬漢字片仮名交り表記。一筆。聖藩文庫とは金沢藩の支藩であつた大聖寺藩学問所の旧文庫。また、印記の錦城小学校とは加賀市立小学校で、一時聖藩文庫が同校に移管されてゐたことがある。

以上の(一)・(三)・(四)系統の諸本は、酒井文庫本翻刻の際に校合本として使用した。

〔五〕 島原公民館蔵松平文庫『赤松物語』 江戸初期写

①松一九一三六②左端上方白無地紙題簽「赤松物語」(同筆)③なし④代赭色無地紙表紙⑤ 27.1×20.3 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙首1尾1、本文31丁⑨10行⑩墨書入あり(同筆)、ミセケチあり(別筆)⑪なし⑫三二丁裏左下隅「尚舎源忠房」(青色方形陽刻印)、その下に続けて「文庫」(楕円形朱陰刻印)⑬漢字平仮名交り表記。一筆。松平忠房旧蔵本。現存本中、最古の写本か。

〔六〕 国立国会図書館蔵『赤松物語』 江戸初期写

①二二一二四②左上方に無地鳥の子紙題簽「赤松物語」(同筆)③なし④褐色無地紙表紙⑤ 27.4×19.5 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙首1尾1、本文45丁⑨8行⑩朱引あり(同筆)⑪なし⑫一丁表右上に「帝国図書館蔵」(朱方形陽刻印)、明治三五年三月八日購求の朱円形陽刻印、首遊紙裏に「鈴木庄司」(黒方形陽刻印)⑬漢字平仮名交り表記。一筆。『帝国図書館蔵書目録』とこれを受けた『総目録』も「異本」の注を付すが、普通の『赤松物語』である。

〔七〕 東京大学総合図書館蔵南葵文庫『赤松物語』 江戸中期写

①G二九一五九一②左端上方に打付書「赤松物語」(同筆)③赤松物語④茶色無地紙表紙⑤ 27×19 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙なし、『赤松物語』本文16丁、全冊49丁⑨12行⑩朱と墨の二種の書入あり。朱は別筆、墨は同筆か⑪なし⑫表見返しに「東京帝国大学図書印」、一丁表右上隅「屋春武呂」(小中村清矩蔵書印)、「南葵文庫」、右下隅「東淵文庫」

(いずれも朱方形陽刻印) ⑬漢字平仮名交り表記。『大内義隆記』(中)・『国府台御没落之事』(後)との三話合綴、一筆。

〔八〕東京教育大学図書館蔵『赤松物語』安永五年写

①ヨ三八②左端上方に丁字引き紙題簽「赤松物語全」③なし④水玉模様入り多色墨流し紙表紙。裏に題詠歌の書き込みがあるため、色紙の裏を表紙に仕立て直したものと推察。⑤26.6×19.5⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙なし、本文27丁⑨11行⑩墨書入あり(同筆)。但し、頭注として貼付。朱と墨両様のミセケチあり(同筆)⑪二六丁裏より二七丁表まで次の跋文あり(同筆)。「右赤松物語は巻の首に当將軍普広院と書けるを以て考るに此書は其時代の人の書る実録なり赤松にゆかりある人の書るにや赤松か事をいみじく書たり夫父を弑し君を弑する事罪これより大なるはなし赤松か君を弑して後其御頭を礼拝し仏事を行ひしは前後の志大に相違へり実に狂人とこそいふへけれ後の事を以て前の事をつくのはんと思へるは甚おろかなる心なり刺かの御頸に對して前世の業因にて今は如此御入候とも来世にては仏果に至り給へと云けるこそ心得かたけれ我か手を下して父君を弑して是前世の業因なり我か罪にあらずといは、忠孝の道は不路ふへし是仏説におはれて人倫の大道を乱すものなり又巻の終に昔より天下に弓取多しといへとも此赤松ほとんたけき人はたくひなかりしとそ聞えけると記したり武士としてはたけきを称美すへき事なれとも人倫の大法にそむき忠孝の道にたかひて唯ひとへに猛きのみなるは人倫にあらず虎狼のたけきに同じ何ぞ称美すへけんや赤松か如きは人面獣心といふへし読者これを察せよ 安永五年丙申秋八月廿六日」。また、二七丁裏に翌日の日付で、本文の「普広院殿は地藏菩薩の化身」について考察を施した追記がある(省略)。⑫一丁表右上に、「東京高等師範学校図書印」、右下に「月の屋」(横山由清蔵書印。二者朱方形陽刻印)、中央に大正一一年三月三十一日納入の印記あり⑬漢字平仮交り表記。一筆。伊勢貞丈書写本。

〔九〕 長崎県平戸市松浦史料博物館蔵『赤松物語』 文政頃写

① 甲二〇〇—七七② 左端上方に黄色地子持梓紙題簽（後付）「赤松物語」林家蔵本 全 ③ なし④ 丁字引紙表紙⑤ 27.8 × 19.9 ⑥ 袋綴⑦ 楮紙⑧ 遊紙なし、本文33丁⑨ 9行。一二丁のみ8行⑩ 墨書入あり（同筆）⑪ なし⑫ 一丁表右端下「平戸藩蔵書」「楽歳堂図書記」（朱方形陽刻印）⑬ 漢字平仮名交り表記。一筆。平戸藩主松浦静山旧蔵本。旧松浦家蔵書『図書類目録』其二には文政一二年（一八二九）写とあるが、何による判定なのか、同館でも不詳の由。但し、書体等から推して当時の書写と判定される。

〔一〇〕 加賀市立図書館蔵聖藩文庫『赤松物語』 江戸中期写

① 二五② 左端上方に金の切箔と金泥による松樹絵入り紙題簽「赤松物語全」（同筆）③ なし④ 薄茶色無地紙表紙⑤ 25.8 × 18.7 ⑥ 袋綴（五つ目綴）⑦ 楮紙⑧ 遊紙なし、本文28丁⑨ 10行⑩ 墨書入は同筆、朱のミセケチは別筆か。藍色の注箋あり⑪ なし⑫ 一丁表右上隅に「錦城小学校印」（朱方形陽刻印）⑬ 漢字平仮名交り表記。一筆。

〔一一〕 宮内庁書陵部蔵松岡本『赤松物語』 江戸末期写

① 二〇七—九〇六② 左端上方に鳥の子題簽「赤松物語」（同筆）③ なし④ 丁字引紙表紙⑤ 27.2 × 19.3 ⑥ 袋綴⑦ 楮紙⑧ 遊紙首1尾0、本文33丁⑨ 9行⑩ なし⑪ なし⑫ 一丁表右上隅「帝室圖書」、右下「松岡文庫」（朱方形陽刻印）⑬ 漢字平仮名交り表記。一筆。松岡本とは筑後久留米藩士（江戸在住）で和学講談所会頭を勤めた松岡辰方旧蔵本。

〔一二〕 書陵部蔵椿亭叢書『赤松物語』 天保九年写

① 一〇三—一一② 左上方に打付書き「椿亭叢書四」（同筆）③ 一丁表裏に「椿亭叢書卷之四 一結城戦場記 一赤松物語 一御弓御所様御討死物語 一名鴻台御没落 以上三種」④ 柿渋色無地紙表紙⑤ 24.3 × 17.2 ⑥ 袋綴⑦ 楮紙⑧ 遊紙なし、『赤松物語』本文32丁⑨ 9行⑩ 書入（同筆）⑪ 序（省略）、卷末に奥書（同筆）、「天保九年 戊戌 年十月廿八日 越治直

澄」⑫一丁表右上隅に「明治十八年改」、その横に「図書寮印」、右下に三文判様の「水野」(いずれも朱陽刻印)⑬漢字平仮名交り表記。序・系譜は寛文九年版本から転記したもの(途中誤脱あり)。この後に群書類従『嘉吉記』の一節を抜萃。椿亭叢書とは、越智直澄が天保七年から九年までに書写収集した叢書。

〔一三〕 東北大学図書館蔵狩野文庫『嘉吉乱記』江戸中期写

①三―四九一三―②左端上方白無地紙題簽「嘉吉乱記全」(別筆。書入と同筆)③なし。但し、首遊紙に題簽と同筆で「一本ニ嘉吉乱記」と書入あり④空色無地紙表紙⑤ 26×18.9 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙首1尾1(但し、図書館側で付したものの、書入1、本文40丁⑨8行⑩墨書入あり(別筆。題簽と同筆)⑪なし⑫墨付一丁表右端上方 $\square\square$ 氏^(明)藏書印」、下方「荒井泰治氏寄付金ヲ以テ購入セル大学博士狩野亨吉氏旧藏書」(朱方形陽刻印)⑬漢字片仮名交り表記。一筆。題簽。書入は本文と同時代のものと推定。

〔一四〕 書陵部蔵続群書類従原本『嘉吉物語』文化頃写か

①四五三―二(巻五七七)②中央に横長の鳥の子紙題簽「嘉吉物語」、その左側に楮紙刷簽「続群書類従」(余白に「五百七十七」と墨書)、右側上方に「家十一」③「嘉吉物語」(別筆。朱書端作り「嘉吉物語」と同筆。書体から推して中山信名の筆跡と思われる)④薄茶色無地紙表紙⑤ 25×18.7 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙首1尾1、本文41丁⑨8行⑩墨書入は三種で、行間書入は同筆、外・内題、序は別筆⑪なし⑫本文一丁表「宮内省図書印」「和学講談所」の朱方形陽刻印。⑬漢字平仮名交り表記。一筆。一丁裏に「此書真片仮名^{末ノ傍}書[□]全ク嘉吉記ノ文ナリ平仮名文而已取ヘシ」の注記がある(別筆)。これは本文の行間に書込まれた漢字片仮名交り文が群書類従『嘉吉記』の本文であることを指摘したもの。

〔一五〕 静嘉堂文庫蔵『嘉吉物語』文化七年写

①七二—三五②左端上方白紙題簽「嘉吉物語」（余白に後の書入で「中山信名自筆」とある）③なし④薄柿色無地紙表紙
⑤23.3×16.6⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙首1尾1、本文23丁⑨10行⑩墨書入・ミセケチは同筆、朱書入は別筆。⑪奥書「右嘉
吉物語原本無題号今按文体与結城戰場物語相似或是同人作乎故私加題名謂尔 文化七年庚午初秋 幕府歩行隊士中
山平四郎 源（花押）」⑫一丁表「色川参中藏書」（桃色方形陽刻印）、「静嘉堂藏書」（朱方形陽刻印）⑬漢字平仮名
交り表記。一筆。料紙の紙背は『將門記』（稲葉通邦模刻本）の写。中山信名は天明七年（一七八七）常陸国に生
れ、一六歳の時江戸に出て塙保己一門下となる。群書類從編纂の時校訂の役を担当、後、和学講談所の教授を勤め
た。続群書類從編纂準備の主要人物であつたが、天保七年（一八三六）に没した。その藏書が続類從編纂に重要な
役割を果たした。色川三中は常陸国の人で、田中頼庸・小田以文と並ぶ当時の国学者。信名と親交があり、のちに信
名の遺書を塙家より買取つた。なお、第一部で述べた静嘉堂文庫現藏『赤松盛衰記』も三中旧藏本である。

〔一六〕 県立大分図書館藏碩田叢史「嘉吉記」 江戸中期写

①K〇九〇—Se二五—和一四三②左上方に子持杵題簽「碩田叢史嘉吉記」（後付）③なし④薄茶色無地紙表紙⑤25.5×
16.6⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙なし、本文44丁⑨7×8行⑩振仮名あり（同筆と別筆交るか）⑪なし⑫県立図書館印以外な
し⑬漢字平仮名交り表記。一筆。表紙に県立図書館の付箋あり「後藤碩田先生遺書 別府日名（ラベル貼付で不明）」大正七年九月
二十一日寄付五十冊ノ内。後藤碩田（ゴトウ）は地元の国学者で、文化二年（一八〇五）生、明治一五年（一八八二）没。

〔一七〕 寛文九年版「嘉吉軍記」（筆者架藏本使用）

②左端上方に楮紙題簽「赤松嘉吉軍記」③なし。但し、序文の初めに「嘉吉軍記」、尾題「赤松記」、版心「嘉吉記」
④紺色無地紙表紙⑤表紙26.7×18.4、子持杵内20.4×21.0⑥袋綴⑦楮紙⑧9行⑩振仮名（刷込）⑪刊記「寛文九
年（己酉） 捻臘月 吉田四郎右衛門」。序文「嘉吉軍記不知何人之作也藏于予家田矣剗氏請登版貽将来於是繙閱之則

詞語之淺陋藉甚矣欲削改之則不耐其夥因且仍其旧貫唯踈謬之甚者粗加點竄以附与焉於戲讀此書監之而知為君而不尽君之道者身試名辱禍流後世為臣而犯弑逆之罪者勢威雖赫々赤族不旋踵則其為教戒不亦善乎人須捨詞語之陋而取教戒之善也詩日采芣采菲無以下体者其斯之謂乎 寛文己酉陽復之月中橋道室^{寿成}序」⑬漢字平仮名交り表記。序の後に赤松家系譜が三丁に渡って収載されているが、誤り多し。版心には丁付あり。

〔一八〕 金沢市立図書館蔵加越能文庫『嘉吉乱記』 寛文二年写

①一六二―二四七②左上方に紙題簽「嘉吉記全」③嘉吉乱記④灰ねずみ色無地紙表紙⑤ 15.3×18.3 ⑥列帖装⑦鳥の子紙⑧遊紙首1尾1、本文23丁⑨14行⑩墨書入あり(同筆)⑪奥書(同筆)「寛文十一年中秋中旬直方書」⑫一丁表に「日拱基□」(方形陰刻印)。遊印であろう。奥書の字の上に朱方形陽刻印あり⑬漢字平仮名交り表記。一筆。奥書の後に赤松家系図が記されており、「直方撰書」とある(同筆)。直方とは加賀藩家老今枝直方のこと。

〔一九〕 加賀市立図書館蔵聖藩文庫『嘉吉乱記』 江戸初期写

①二五〇②左上方に金の切箔散しに金泥松樹絵入り紙題簽「嘉吉乱記全」③嘉吉乱記④小巾繫ぎに花模様入り納戸色地紙表紙⑤ 25.3×18.0 ⑥列帖装⑦鳥の子紙⑧遊紙首0尾2、本文26丁⑨9行⑩なし⑪なし⑫一丁表「錦城小学校印」(朱方形陽刻印)⑬漢字平仮名交り表記。一筆。

〔二〇〕 彰考館文庫蔵『嘉吉乱記』 寛政二年写

①丑部二②左上方に鳥の子厚様題簽「嘉吉乱記」③嘉吉乱記④雲母刷り象牙色無地紙表紙⑤ 28.8×19.2 ⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙なし、本文24丁⑨10行⑩朱・墨両様の書入あり(同筆か)⑪裏見返しに奥書「寛政二年以安積三郎衛門本写」⑫一丁表に「彰考館」(ふくべ形朱陽刻印)、題簽「全」の文字上に「丑」^(?)の朱陽刻印⑬漢字平仮名交り表記。一筆。安積三郎衛門とは、赤松氏の重臣安積氏の後裔であろう。

〔二二〕 金沢市立図書館蔵加越能文庫『嘉吉乱記』 江戸中期末から末期初頃写

①一六二—二四八②左上方に銀箔散し子持梓紙題簽「嘉吉乱記」③嘉吉乱記④こげ茶色無地鳥の子紙表紙⑤

24.0 × 18.2

⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙なし、本文24丁⑨10行⑩墨書入・ミセケチあり（同筆）⑪なし⑫二丁表「前田氏尊経閣図書記」、二四丁裏に昭和三四年三月一〇日市立図書館で受理した旨の印記あり⑬漢字平仮名交り表記。一筆。

〔二三〕 名古屋市立鶴舞中央図書館蔵『赤松略記』 江戸中期写

①河カ—三四②左上方に子持梓白地紙題簽「嘉吉記 赤松略記 上月記 全」③赤松略記④丁字引紙表紙⑤

23.6 × 15.7

⑥袋綴⑦楮紙⑧遊紙なし、本文31丁⑨9行⑩墨書入あり（同筆）⑪卷末に本奥書「于時万治元於江府堀氏之以本書写畢 戊戌三月五日 池田幸武」⑫前表紙に「河村秀頼本」の貼紙（「名図」とあり、図書館側で付したもの）、二丁表「市立名古屋図書館蔵印」「河村家蔵」（朱方形陽刻印）。大正一二年二月一日に図書館で受理した旨の印記あり⑬漢字片仮名交り表記。一筆。『嘉吉記』・『上月記』と合綴。

〔二三〕 神宮文庫蔵『赤松略記』（未見）

二 諸本の考察

これらの諸本は比較校合の結果、大きく三つに類別される。第一類は酒井本『嘉吉記』系で、これに属するのは〔一〕の酒井本一本のみ、第二類は福住道祐所持本『嘉吉記』系で、これに属する本は〔二〕から〔四〕までの三本、第三類は『赤松物語』系で、これに属する本は残りの一九本である。以下、これら三類の各類別ごとに考察するが、初めに第二類本を取り上げることにする。

(1) 第二類本の考察

第二類に属する本は、(一)の尊経閣文庫本、(二)の天淵文庫本、(三)の聖藩文庫本の三本である。この類本の伝来については別稿に詳述する予定である。原本は高松松平家に襲藏されていたが、過ぐる大戦により焼失した。書写年代の新旧からすると如上の順序となるが、しかし本文間の異同は語句はもとより用字に至るまでほとんど相違しない。ただ、尊経閣本・聖藩本が「眨・松・也・成」の字を用いるのに対して、天淵本は「時・忝・ナリ・ナリ」の字を用いている。その他、(一)と(三)の間に存する数ヶ所の異同も尊経閣本と聖藩本では同じであり、また聖藩文庫が加賀前田家の支藩の文庫であることを考えると、聖藩本は尊経閣本かその類本から転写された可能性が強い(但し、『嘉吉記』と『赤松伝』へ聖藩本は『赤松家伝』とする)の合綴順序は両者相違し、天淵本と聖藩本が同じ。では、尊経閣本と天淵本の関係はどうか。両者間の本文異同は単純で微細なものながら一四ヶ所あり、そのうち尊経閣本の誤りと思われるもの九ヶ所、天淵本の誤りと思われるもの四ヶ所、どちらとも判定しかねるもの一ヶ所である。このように本文異同の正誤が一方に偏在していないところから判断すると、両者は親子関係のような縦の書写関係をなすものではなく、兄弟関係のような横の関係をなすものと考えられる。このことから、第二類を代表するものとしては、尊経閣本と天淵本のどちらを採っても差支えないことができる。

(2) 第三類本の考察

第三類に属する諸本は、さらに次のように分けられる。

(甲) 赤松物語系諸本 (島原松平文庫本・国会図書館本・南葵文庫本・東教大図書館本・松浦史料館本・聖藩文庫本・書陵部松岡本・書陵部椿亭叢書本・狩野文庫本)

(乙) 嘉吉物語系諸本 (続群書類従本・静嘉堂文庫本・改定史籍集覧本)

(丙) 嘉吉軍記系諸本 (県立大分図書館本・寛文九年版本)

(丁)嘉吉乱記系諸本（金沢市立図書館今枝本・聖藩文庫本・金沢市立図書館別本・彰考館本）

(戊)赤松略記系諸本（鶴舞図書館本・神宮文庫本）

このうち(戊)の『赤松略記』については、第一部で述べた。この本はその書名から察せられるように、『赤松物語』を略述したものである。このことは『赤松略記』の本文中に用いられている「観応」の年号によって確かめられよう。すなわち、『嘉吉物語』諸本には義教の首を前に満祐が赤松家累代の勲功を述べる件りがある。その第二番目に都に攻入った南朝方を、諸氏が足利方から離反して行く中で赤松一門が中心となり撃退した大功を述べ立てている。ところが、その事件の起った年号が、諸本間で著しく相違しているのである。その中で(甲)の赤松物語系のみが、「観応」の年号を用いている（ただし、島原松平文庫本は「徳応」の「徳」をミセケチにし、右横に「勘」左横に「暦」と書入れる（ママ））。別筆。国会図書館本は「徳応」。この年号の問題については後述する。『赤松略記』が「観応」の年号を何の疑義も挟まず記している点を考慮すると、拠った本文がその年号を明確に記していたと想像される。繰り返すと、『赤松略記』は赤松物語系本を典拠としてそれを略述し、また巻末の落首から推測されるように、『嘉吉之記』もしくはその拠った資料と等しいものを参看しつつ成立したと考えられる。但し、既述したように、『赤松略記』は万治元年以前の成立であるところから、現存赤松物語系諸本に拠った可能性はないといえるだろう（島原松平文庫本と国会図書館本は江戸初期の写であるが、後者は万治元年よりも後の写と思われる。前者はあるいはそれ以前の写かと思われるが、しかしミセケチで書き変えられた「勘」の字は後筆であるため、如上の判断を下した）。

(丁)の『嘉吉乱記』は、金沢市立図書館蔵今枝本が寛文二年（一六七二）に書写されているためそれ以前、一方内容的には応仁の乱で大功を立てた赤松政則が左京大夫に任じられた記事で終わっている。政則任左京大夫の年、すなわち明応元年（一四九二）以後の成立である。この系統の諸本は誤記や誤脱による単純な本文異同が少し見出せる

程度で、意識的な改竄は皆無である。その中で用字の点から今枝本が最もこの本の古態を伝えると思われるが、惜しいことに速筆であったためか誤脱が多く、目移りによる一行の脱落箇所が三カ所もある。本文校合の結果から見て、この今枝本に近いのは彰考館本である。この本は今枝本の元の本に拠ったと思われるが、その漢字の部分をほとんど平仮名表記に変えており、このため読みやすい本文となっている。金沢別本もどちらかといえば今枝本に近いようである。聖藩文庫本は以上の三本と多少趣きを異にするが、書写年時の古さ、本の柄の善さからいって、『嘉吉乱記』を読む場合にはこの本が最も無難であらう。

『嘉吉乱記』の内容は、次の順序で展開している(等号で繋いだ書名は、類似関係を示す。なお、以下にいう『嘉吉物語』とは一類から三類までの諸本の総称、『嘉吉記』とは群書類従卷三七四所収のもの。①序―嘉吉物語②乱の原因―嘉吉記③將軍暗殺の経緯―嘉吉記・嘉吉物語④事件勃発から乱の終熄まで―嘉吉物語⑤乱の後日譚―嘉吉記。この内容展開から知られるように、『嘉吉乱記』は『嘉吉物語』や『嘉吉記』と密接な関係を有している。その實際を本文に即してみると、例えば序文の關係は次のようになる。

表(1)

『嘉吉物語』(松平文庫本『赤松物語』より引用)

夫春の花の樹頭にのほるは上求菩提の機をす、め秋の月の水底にしつむは下化衆生の相をあらはす人間有為無常のありさま因果の道理のかれかたき物なり

『嘉吉乱記』(聖藩文庫本)

夫春の花の樹頭にひらき秋の月の水底に沈む事上求下化の相を示す人間有為転変の習ひ盛者は必おとろふ理り今以おとろくへき(に)非す(に)は他本によって補った)

『嘉吉物語』のこの序文は、寛文九年版本と『赤松略記』以外の諸本に共通しており、それは『秋夜長物語』の序文、「夫、春ノ花ノ樹頭ニノホルハ、上求菩提ノ機ヲススメ、秋ノ月ノ水底ニクトルハ、下化ノ衆生ノ相ヲアラハス、天

語ナクシテ、物々皆顯示之」（永和三年へ一三七七）奥書本による）を典拠としたものと思われる。一方、『嘉吉乱記』の序文は『嘉吉物語』に比べて『秋夜長物語』のそれとは径庭があり、しかも『秋夜長物語』にない「人間有為転変の習ひ」の句が、『嘉吉物語』の「人間有為無常のありさま」と酷似している。これらのことから三本の序文の関係は、『秋夜長物語』→『嘉吉物語』→『嘉吉乱記』のような影響関係であつたと考えられる。

一方、上述したように、『嘉吉乱記』はその内部に『嘉吉物語』や『嘉吉記』の本文とほとんど同じ本文を有しており、両書以外の本文と交渉した形跡は見当らない。その上、両書の本文は『嘉吉乱記』の内部で渾然一体をなさず、松に竹を接いだごとく両本文の接ぎ目は截然と分かれているのである。このような『嘉吉乱記』の在り方は、上述した序文の影響関係を考慮に入れると、『嘉吉物語』と『嘉吉記』の本文を適宜組み合わせた結果であると考えられる。そして、『嘉吉乱記』の記事は『嘉吉物語』に拠っており、それにない事件の遠因や乱の後日譚を『嘉吉記』に拠っている。このことから判断すると、『嘉吉乱記』は『嘉吉物語』を書写しつつも、それにない記事を『嘉吉記』から抜き取って前後に付加したと考えられるのである。この意味で『嘉吉乱記』は、あくまでも『嘉吉物語』の一系統本であるというべきであろう。

では、『嘉吉乱記』が典拠としたのは、『嘉吉物語』諸本中のどれであろうか。この場合も『赤松略記』の場合と同様に、前述の年号が手掛りとなる。『嘉吉乱記』は諸本それを「暦応」と明記しているが、この年号と合致するのは現存本では僅かに一本、島原松平文庫『赤松物語』のみである。但し、島原松平本の「暦応」の「暦」は、既述したようにミセケチによる書変えであることを考慮する必要がある。恐らくは『赤松物語』系の島原松平本などより古態的な本文に拠ったものであろう。何となれば、『嘉吉乱記』は『赤松物語』系本に拠ったと思われるながら、部分的にはあるが現存本を訂正する箇所があるからである。すなわち、他の諸本総てが左馬助を彦次郎とともに伊勢の国に落

下ったとしながら、その後突如として戦場の水田城に立籠っているように叙述している。これは首尾一貫しない記述で、瑕瑾であることは否めない。ところが、『嘉吉乱記』はその間に、「扱また左馬助則繁は伊勢より引別て水田の城へ落行」の一句を挿入して首尾を整えている。この挿入句は『嘉吉乱記』の作者(編者といふべきか)が文意を整えるために書加えた可能性がないでもないが、しかし『嘉吉乱記』は『嘉吉物語』と『嘉吉記』の本文を繋ぐ場合にのみ間隙を埋めるのに適した語句を付加するのである(序文は特例)。そういう点からすると、如上の挿入句は、やはり典拠とした本文に本来的に存したものであるであろう。その他、例えば「左馬助則繁」の名は『嘉吉乱記』の方が正しく、『赤松物語』の方が誤っていることなどを考えると、上述したとおり、『嘉吉乱記』の依拠した『赤松物語』は、現存本よりも古態的な本であつたろうという結論が導き出せるのである。

(丙)の項に掲げた(一六)の県立大分図書館本と(一七)の寛文九年版本とが同系統本であることは、例えば表(2)に掲げた本文比較によつて記事の長短増減は別にして、叙述の流れの点で近似していることは一目瞭然であろう。この部分では、両者はさらに接近しているのである。

この大分本と寛文版本とを校合すると、例えば寛文版本が「左馬助殿」と記すところを大分本は「入助殿」と誤つたり、「五百余騎」とあるところを「五百四騎」と誤つたりしている。このように大分本は不注意による単純な過誤が散見されるが、しかし本文自体は寛文版本の上位に位するものと思われる。例えば、寛文版本は義教の首を捧げた赤松勢が播磨に到着した日を「六月廿日」とするが、これは大分本のように「六月廿五日」とあるのが正しい。というのは、六月二四日に義教を暗殺した赤松勢の下着日だからである。また、寛文版本は大分本に存する序文を有しない。これも寛文版本もしくはその近辺の本に存しなかつた序文を大分本が他の諸本から剔出して付加したと考えるよりも、

表(2)

赤松物語

大分図書館本

寛文九年版本

<p>一の木には赤松入道の頸二の木には安積か頸をそかけられけりさて左のかたは京極殿右のかたは六角殿のうけたまはりにて大名小名着到をつけて都合一万三千騎番をおきて頸のけいごをし給ふは誠に前代未聞のありさま也此物語を見きかん人は真実のおもひをなして奉公を仕るへし就中普光院殿は地藏菩薩の化身にてましましけるゆへに善悪共にはけしき將軍にてそおはしましけるむかしより天下に弓とりをほしといへ共此赤松ほとんたけき人はたくひなかりしとそ聞えける</p>	<p>左の方には京極殿右のかたには六角殿其外大名小名番衆にて着到を付て一万三千騎にて頸の供をし給ふ一の枝には入道殿の御頸をかけ二の枝にはあつみかくひをかけらるる事前代未聞のありさま也あはれのいたつて深き事は何事か是にしかんや此物語を見きかん人は真実の心をなして奉公を仕へし就中普光院殿は地藏の御けしんにて善悪深き將軍にておはします也赤松殿も天下に弓取を、しと申せ共あかまつとのに増へき人ある間敷と天下万民申ける</p>	<p>左ノ方ニハ京極殿右ノ方ニハ六角殿其外大名小名番衆ニテ着到ヲ付テ一万三千騎ニテ頸ノ供ヲシ給フ一ノ枝ニハ入道殿ノ御頸ヲ懸^ケニ^ミ枝ニハ彦二郎殿ノ御頸ヲ懸^ケ三ノ枝ニハ安積カ頸ヲ被懸事前代未聞^{ミモ}ノアリサマ^{アハ}消息也哀レノ至テ深キ事ハ何事カ是ニ如^{シカ}ンヤ此物語ヲ見聞^{ミキカ}ン人ハ真実^{シンジツ}ノ心ヲ作^{ナシ}テ奉公ヲイタシ主君ヲ蔑如ニスル事ナカルヘキモノ也</p>
--	---	--

寛文版本がこれを落したと考える方が自然であろう。というのは、寛文版本は序文を必要としなかったからである。寛文版本はその序文に記されているように、「取教戒之善」ために版行されたものである。このため序文の抒情性を必要としなかったらしい。また、「^{スノ}欲人之知^{シノ}赤松家之顛末故^ヲ」に書かれたこともその一因であろう。以上のことから寛文版本は、大分本系の古本を典拠として成立したと考えられるのである。

では、嘉吉軍記系本と赤松物語系本とは、どちらがより古態的な本文であろうか。例えば、満祐の自決の場面を比べてみると、大分本は、「御掌を合給ひ深祈誓して御年六十一と申に終御腹を被^{ツイニ}召けり去程にむねとの御一門皆々御腹めされける程に以上六十九人一つ座敷になおて御はらめされけり」とあるが、『赤松物語』はこれを、「たなこ、ろをあわせてふかくきせいをなし御年六十一と申にはつゐに御腹をめされけり(むねとの)御一門六十九人おなし座敷になみゐつゝみなく腹をきられけり」と叙している。この場面は満祐の自決とともに主だった武将六十九人が追つて自害した旨を述べたものである。大分本はこれを回りくどく表現しており、一説ではなかなか理解できない。恐らく『赤松物語』の本文が、何らかの理由で迂回させられた結果生じた悪文であろう。このような例は決して少なくなく、ために大分本は『赤松物語』の下位に立つべき本と判断するのである。これにより三本の関係は、まず『赤松物語』があり、これから大分本の元本が生まれ、さらにそれを典拠として寛文版本が成立したということになると思われる。この三本の関係を念頭に入れて、再度、表(2)を見てみよう。すると、『赤松物語』から大分本を経て寛文版本に至る間に、一つの思想が形成されて行くのが看取される。前述したように、寛文版本は教誡の意図を籠めて版行されたために、その前段階では稀薄であつた教訓性がより濃密となつた。すなわち、「此物語を見きかん人は眞実のおもひをなして奉公を仕るへし」であつた識めが、寛文版本に至つていつの間にか、「此物語ヲ見聞ン人ハ眞実の心ヲ作テ奉公ヲイタシ主君ヲ蔑如ニスル事ナカルヘキモノ也」のように変貌した。ここには幕藩体制の定着につれて浸透して行く「忠君・奉公」といった儒教思想の反映が顕現しているようである。後述するが、第一類の酒井本にはこのような教訓性はない。恐らくそれが本来的な在り方であつたのだろう。第一部で触れた『赤松略記』がそうであつたように、『嘉吉物語』の作者が苦心しつつ創始した赤松家擁護の姿勢を、儒教道德思想の覆いで包み込んでしまつたもの、それが寛文版本であつたといえよう。

(乙)の『嘉吉物語』(この場合の『嘉吉物語』とは、『嘉吉物語』の題名を持つ三本の称)のうち、改定史籍集覽本の底本が何であつたか、判然としない。この本は本文的にも仮名づかいの点でも、続群書類従本とほとんど同じである。ただ、序文の「下化衆生」が「下他衣生」であつたり、赤松一門の名を連ねた際に「上月」の名が落ちていたりするため、やはり続類従本とは異なる底本を用いたと思われる。識語にいう再校に使つた「大学本」とは東京帝国大学蔵本であろうが、現在東大図書館には(七)の南葵文庫本の外にこの類本はない。焼失したのであろうか。いずれにしても、三本中、最下位に位置する本である。

(二五)の静嘉堂本の筆者中山信名は塙保己一門下で、続群書類従の編纂準備の初期における主要人物である。この一事からしても(一四)の続群書類従本と静嘉堂本とが関係あることは、凡そ察しがつく。事実、続類従本の内題は静嘉堂本と同じく信名筆と思われるので、両本が関係あることは確かである。本文上も目移りによる一行脱落箇所がある外は二、三の誤写・誤脱がある程度で、全く同じであるといつてもよい。但し、続類従本が赤松一族の「上月」氏を「十一月」と誤読しているのに対して、静嘉堂本がそれを正確に書き写しているところを見ると、両者は兄弟関係をなすものと思われる(翻刻された続類従本には「十一月」の横に「マ、」と注書してあるが、原本にはない)。(乙)系統の三本中では続類従本を代表させて差支えないが、ただ翻刻されたものは誤読や脱落が多く、この本を使用する場合は書陵部蔵の原本に当る必要がある。

『嘉吉物語』は本文校合の結果、『赤松物語』と同類本であることが明白である。そして、両者を比較すると、誤写や誤脱の点からいって、『嘉吉物語』は『赤松物語』の下位に立つ本であると思われる。その題名の違いについては、付章の『「嘉吉物語」書名考』において考察する。

これまで検討してきた乙類・丙類・丁類・戊類の各諸本は、結局、『赤松物語』から分岐したものや、それを典拠

としたものであった。換言すれば、甲類の赤松物語系の元本が、即第三類諸本の元本ということになる。しかし、当然のことながらその本は現存しておらず、結局は現存本の中から最も古態的な本文を有する善本を選ぶより外ないだろう。一体、それに該当する本は、どれなのか。以下、(甲)に属する諸本を考察して行くことにする。

まず、(一二)の椿亭叢書本であるが、この本は書写年時が最も新しいというハンディからであろう、誤字・誤脱の多さは覆い難い。この本は赤松物語系諸本中、最下位に位置する本である。

(一一)の松岡本も、書写年時の新しさでは椿亭叢書本とさ程変らない。しかし、この本は(九)の松浦本を元に行っていることが確認されるので、必然的に松浦本の位置に近づくことになる。松岡本と松浦本とを比べると、本文内容は勿論のこと、用字はほとんど、文字の位置や行数に至っては完全に一致する。しかし、松岡本は松浦本から直接転写されたのではないようである。というのは、両者は「の」を「か」と誤写したような単純ミスが十数ヶ所散在するが、そのうちの一ヶ所だけは松岡本の方が正しいと考えられる。松岡本が書写時において誤りを正した可能性がなくはないが、しかし以下のことを考慮すると、叙上の判断は難しいであろう。すなわち、松岡本の二丁裏六行目に数字分の空白が存するが、松浦本の当該箇所を見ると、「頸をた(まはりて)」の三字が書かれて^レいる。もし、松浦本から直接転写したとすれば、松岡本は三字分空白にすべき必然性はない筈である。これは松岡本の拠った親本の当該箇所が損傷されて判読できなかったことによるものと考えるべきであろう。以上の二点を考慮すると、松浦本と松岡本とは譬えていえば伯父と甥の関係となろう。両書の親本(松岡本にとっては祖父本というべきか)についてさらに推測を重ねれば、松浦本の題簽に「林家蔵本」とあるところから、それは江戸幕府の儒官林家の所蔵本ではなかったかと思われる。何となれば、その題簽は後の付加であり、当然旧蔵者松浦静山蔵とすべきであったのに、実際は如上の書き方であった。他方、『甲子夜話』の著者松浦静山は学を好み、林家を継いだ林述齋とは昵懇の間柄であった。彼我考慮

に入れると、松浦本が林家の蔵本を写した可能性はあろうかと思う。

ところで、「赤松物語」の書名を有する諸本間においては、単純な誤字・誤脱以外に顕著な本文異同がある訳ではない。しかし、そのような幽かな異同の中にあつて、松浦本と〔七〕の南葵本とは、他本に比べてより緊密な関係が感じられるのである。また、南葵本は一方で〔八〕の東教大本とも近似した関係を有している。そして、これら諸本間で幾度かの転写が行われたのは確実のようである。この南葵本・東教大本・松浦本・松岡本を、以後、南葵グループと呼称する。

〔一〇〕の聖藩文庫本は書写年代は新しいが、意外に誤りの少い本である。依拠した本文が良質であつたためであろう。その本文を検討すると、例えば南葵本グループが「彦次郎」と表記するのに対して「彦二郎」と記し、播磨へ落る赤松勢の総数を南葵本グループが「三百八十九騎」と記すのに対して「三百八十九騎」と記している。このような異同箇所を見て行くと、大概、〔五〕の島原松平文庫本や〔六〕の国会図書館本と合致する。中でも松平本に近いようである。恐らく聖藩本が典拠としたのは、松平本近辺の本であつたのだろう。

これに関連して、次に松平本・国会本・狩野本の三本を検討してみたい。前述の聖藩本を含めたこの四本を松平本グループと呼称しよう。このグループは赤松物語系諸本の中ではより近似した本文ではあるが、それでも小さな本文異同が散見される。例えば、松平本と国会本の間でも、八四ヶ所の相違が認められるのである（但し、不注意による相違だけで、取立てて考察する程のものではない）。今、松平本を基に四本の異同箇所を抽出し、その中で松平本と相違する本文の比率を示すと、国会本五五、聖藩本四六、狩野本四〇パーセントである。これでも判るように、聖藩本は国会本よりも松平本に近い。ただ、比率の上では狩野本が最も松平本に近いように思われがちだが、しかしこの本は独自の本文を有する場合が多く、その相違箇所一は他本の一とは、大分趣きを異にしている。狩野本が松平本に近いのは

確かであるが、他本が純粹性を保っているのに対して、それは他の系統本を取り込んでいるようである。

さて、松平本グループの代表ともいべき島原松平文庫本は、赤松物語系諸本では勿論のこと、他の類本を含めても最古の書写年代であろう。筆の運びは速く、ために誤字・誤脱が散見される。しかし、同筆・別筆の二種によって校訂されているので、結果的には元の本文形態がより保たれるところとなった。そういう意味合いで、松平本グループで最善本といえるであろう。例えば、智者繁特の「どく」に松平本は初め「持」を当てているが、後にミセケチで「得」と書き変えている。ところが、他の松平本グループは総て「持」のままである、という具合である。しかし、松平本も「さてこそ」とすべき所を「さてこり」、「一旦」を「一色」、「是則」という人名を「是すなはち」と誤ったりしている(他の松平本グループも同じ)ので、完全な本とはいえない。しかし、松平本グループでは前述したような意味合いから最善本であり、また南葵本グループと比べてもより善本と思われるので、第三類本中の最善本と見做してよいであろう。

かくして、第三類を代表するものは松平本であるという結論を得た。この結果、次なる考察は第一類・第二類・第三類の比較検討による『嘉吉物語』の古態性の追究ということになろう。以下、項を改めてこの問題を考えることにしたい。

三 『嘉吉物語』古態性の追究

(1) 各類本の特徴

各類相互間には、さまざまな相違点がある。今、それを把握するために、表記(人名・年号)、文体、構成、敬語、史実との関連、主題などにつき検討してみよう。

表(3) 第一類本は酒井本、第二類本は天淵本、第三類本は松平本による。但し、誤りがある場合は同類の他本で正した。
以下、同じ書式とする。

	第一類本	第二類本	第三類本
(イ)義教	義教公・御所様・君・將軍・義教將軍・普広院殿	義教公・將軍(家)・將軍義教公・普広院殿・御所様	普広院殿・將軍・御所様
(ロ)赤松満祐 (性具入道)	赤松殿・入道殿・大膳大夫入道殿・性具入道殿・赤松入道性具公・性具	赤松性具入道・性具入道	赤松殿・入道・赤松大膳大夫殿・赤松入道
(ハ)赤松彦次郎 教康	彦次郎教康御曹子・御曹子・赤松彦次郎殿・彦次郎殿	彦次郎教祐・教祐	彦二郎御曹子(南葵本は「教祐」の注を付す)・御曹子
(ニ)赤松左馬助 則繁	赤松左馬助殿・左馬助殿・助殿・左馬助殿祐之・祐之	赤松左馬助祐之・祐之	赤松左馬助殿・左馬助殿・助殿
(山)山名持豊	大夫・山名修理大夫持豊・山名・山名右馬頭・右馬頭	山名右衛門督持豊・山名持豊・持豊	山名修理大夫殿・山名殿・右馬頭殿
(松)松浦氏	松浦	松浦	松田
(ト)文和二年	文和三年	文和二年六月	徳応(勸応・暦応)三年

まず、表記について、各類本は表(3)のように記している。(イ)の將軍義教の表記中、他は問題ないが、「普広院殿」だけは看過できない。第一類本では一回使われているが、それは「サレハ義教公ハ普広院殿ト号シ從一位ヲ賜セラルル」のように、諡号であったことを説明した記事においてである。他の類本にはこのような説明はなく、種々の呼称と混淆して用いられている。その甚しい例は、第三類本の巻初にある「当將軍普広院殿」であろう。「當將軍」と諡号の「普広院殿」とを結び付けたのは第三類本の過失であって、やはりこれは第一類本の「當將軍義教公」や第二類本の「將軍義教公」のような表記が、本来的なものであったと考えるべきであろう(第二類本は「普広院殿」の呼称を巻半ばより用いる)。そして、この諡号は正しくは第一類本のような追贈の記事があった後に用いられるべきものであろう。その意味で(イ)の表記については、第一類本が最も配慮しているといえよう。

(ハ)の「彦次郎教康」は満祐の嫡男である。「建内記」などの一等資料や「尊卑分脈」以下の諸種の「赤松系図」を見ると、総てが如上の表記である。これに合致するのは第一類本のみで、第三類本は「彦次郎」(南葵本グループ)もしくは「彦二郎」(松平本グループ)と記すだけで、教康であったかどうかは不明である(聖藩本が一ヶ所だけ「彦二郎教康御曹司」とする)。但し、南葵本と東教大本は、初出の「彦次郎」の脇に「教祐」と注書している(同筆)が、これは第二類本の表記と同じである。一方、類従本「嘉吉記」や「応仁記」も、「彦次郎教祐」と表記している。既述したように、高坂好氏は『嘉吉記』は事件に関係した武将の官職・姓名がためめで、特に「赤松氏でも中心人物の教康を祐之と書くような始末で、とうてい利用することはできない」と述べて、その史実性を否定した(高坂氏前掲書。但し、文中の「祐之」は「教祐」の誤り)。(イ)の表記については、第一類本が正確ということになる(橋本政次氏は、その著『姫路城史』上巻の中で、専ら教祐の名を用い、教康は初名であったように記しているが、何によったものか示されていない)。この著書は江戸期成立の雑録を資料としているので、史實的に若干不確かな点が見られるのは惜しまれる。

(二)の左馬助則繁について、第三類本は例の場合と同様に「左馬助殿」のような表記をしてその名を記さないの、判然としない。第一類本は二ヶ所で「教之」と記し、第二類本はこれを多用している。この表記は当時の資料を照会しても見当らず、誤りであろうと思われる。また、例の場合と同様、『嘉吉記』や『応仁記』も同じ過誤を犯している。

他の表記については別項で触れるが、表記について概括的にいえば、第一類本が他の類本よりも正確であるということができよう。

では、文体の特徴はどうか。これも概括的にいえば、第一類本の、特に下巻の方は韻律に富んだ文体で、語り物的色彩を帯びているといえよう。例えば、彦次郎が恋人と別れる場面を見ると、そのことが首肯されるであろう。

荒痛ハシヤ彦次郎殿御国下向ノ折々室ノ津ニ遊興仕給ヒシカ此浦ニ有所縁ノ者ノ子ニケシウハアラメ女ノ貌ラウタケク心ヤサシク有ケルヲイツノタニ見染給シ(中略)葉月ノ比風冷カニ雲マカフ暮方思ニワ忍フル事ノマケ、ルニヤ御心知ノ菊童丸シテ初雁ニトナソラヘテ例ノ玉札ヲ饋セラル女モ流石フリハケ難キ黒髪ノ乱ル心トハ成侍レト人ノ心ノ花ノ色ウツロフ水ニ影見ハアタナミニ袖ノ濡モ社セメト七度迄ハ御返モセサリシカ数多度ノ御文^{サハキ}千塚ノニシ木々成ケレハ池ノ面ノ薄氷東風吹風ニトケメレ共人目忍ノ山高ク終逢給夜スカモ無テ打過サセ給ケルニ掛ル周章ノ出来リ(中略)荒労働ヤ此姫是ヨリハ誰ニ見ラレ誰ニアゲラレントタケト等縁ノ髪ヲ剃落シ彼人ノ菩提ト祈宛哲ハ行ヒ侍シカ角テ世ニ存命ハ若秋風ニ吹掃サレテ葛ノ葉ノ恨敷身共成ナハ心ノ外成事モヤアランナム一切ノ仏我ヲ赤松殿ノ尊靈ト一所ニ向取給ト心静に念宛(中略)年十七歳ト申ニハ室ノ入江ニ身ヲシツメ終ニハカ無成ニケリ

第一類本が韻律的であるのは、他の類本に比べて、「サン候」「荒痛シヤ」「アラ優シノ影光ヤ」「去程ニ」などの語句や擬声語が多用されている結果であろう。そして、それらの語句は、特に説経語りに濫用された常套句であることに

留意すべきである。何故ならば、説経語りが生み出され管理されていた母胎と、第一類本の発生母胎とは不可分に繋索されていたと予想されるからである。この点については、後述する。

第一類本が語り物的雰囲気を漂せているのに対して、第二類本はやや記録的な感じを与える。それは例えば第一類本や第三類本が「助殿」とか「山名殿」とか記すのに対して、第二類本が「赤松左馬助祐之」とか「山名右衛門督持豊」のように記したり、あるいは他の類本が抒情的に描出する満祐の自害をも、「九月十日年六十一ト申ニハ終自害ヲセラレケリ」のように叙述する文体によってであろう。とはいえ、第二類本にも「痛ハシヤナ」や「去程ニ」などの語り物的語句が散在している。

以上の二類に対して、第三類本は両者の中間的位置にあるといえよう。

次に、文章表現や構成の面を検討してみよう。三類中、いずれに属する本でもよい、一読して感ずるのは、赤松家擁護の姿勢が強いことである。それは結びの一句、「昔ヨリ天下ニ弓取多シト云トモ此赤松程ノ勇士ハ類ナカリシトソ聞ヘケル」によって、容易に窺知されるであろう(天淵本より引用。第三類本は同句、第一類本は同内容だが、赤松擁護の姿勢がさらに強い)。この赤松家擁護の姿勢は、第一類本において最も昂揚している。その具体例を二例見ることしよう(表(4))。

⑥の例は赤松氏が足利政権樹立に果たした貢献を述べたものである。そんな時、会話文と地の文とを問わず、必ず赤松方を「当手」とし、赤松方の対立者を「敵」とするのが第一類本の特徴である。他の類本は赤松方に立つて叙述しながらも、そこまでの明確さはない。⑥に示された第一類本の赤松擁護の姿勢は、④の例にみられるように、赤松方の敵対者に対して徹底的な批判となって現われる。たとえば事実であつたにせよ、苟くも將軍であつた人物に対して、「平生悪行甚しく」「匹夫」などの批判は強烈である。いうまでもなく、これは赤松嫡流家に対して間断のない圧政を執

表(4)

	第一類本	第二・第三類本
②將軍義教暗殺直後の場面	(赤松の)大剛の武者七八十人御座敷の御供(の)大名に切て懸けれども平生悪行甚しく御情なき君にでましませは御最後御供し又は御敵とひつくんでさしちかへんとする人一人もなく皆々落行手にたゝす赤松方よりも匹夫の義教公こそ討はへりぬ諸士に遺恨なしとて追逃し給ふ	大剛ノ武者七八十人御座敷ノ御供ノ大名ニ切テ懸ケレトモ兼テヨリ御情ナキ君ニテマシマセハ心ヲヨセス皆々落行給フ赤松方ヨリモ流石敵ニテナカリケレハ「慕フニ及ハス」(「」の部分、第三類本は「おひにかしたまふ」)
③義教の首を前に満祐が赤松家累代の勲功を述べる場面	又其後和泉国御退治の時分国の勢を集めて向けるに駒の足立難儀にて右衛門大夫範秀を先として天下の御勢七百余騎討れけりしかれとも当手の勢もりかへし討勝終に一國平均に治りぬ其御陣の忠功おほかたならず右申のへたるはあらまい也そののみならず惣て天下の御大事に勲功を致事度々に及へり	其後亦和泉御退治ノ時先陳ヲ給ハツテ分国ノ勢ヲ集テ向ケルニ駒ノ足立難儀ニテ右衛門大夫範秀ヲ先トシテ天下ノ御勢七百余騎討レケリ夫レノミナラス惣而天下ノ御大事ニ勲功ヲ致ス事度々ニ及ヘリ

った義教への憤怒が吐露されたものであり、このような例は枚挙に暇がない。また、義教とともに批判を浴びせられたのは山名氏である。赤松氏と山名氏は所領が背中合せであつた所為であらう、宿命的な対立関係にあつた。このため明德の乱を起した山名氏清を謀叛人と決めつけ、また「よしなき大夫か申事に御付ありて科もなき我等が一族を御失ひあり」

のように、山名持豊(宗全)を痛烈に批判するのである(応仁の乱の時、赤松政則が細川方に加わった一因は、山名宗全に対する敵意からであった)。

作者のこの姿勢は、敬語表現の中にも明確に示されている。表(3)の(ロ)(二)を見ると判るように、第一類本は赤松方の主要な人物には特例を除き総て「殿」や「公」を付し、また「御」や「給ふ」などの敬語を用いている(特例は満祐の首が京都に送られてきた時に、「性具入道ノ首実験有テ」云々の件りである。しかし、それも他本にない「殊ニ高家タル人」の一句によつて相殺されている)。一方、さすがに義教には「殿」や「公」を付しているものの(但し、上述のようにその前後に批判的言辞が付されている)、山名氏に対しては一切敬語を用いていない。ところが、第二類本は赤松方に対してもその対立者に対しても敬語を用いないのが原則である。逆に第三類本は赤松方であろうとその対立者であろうと、誰かまわす敬語表現を付している。これは一体、何を意味するのだろうか。

(2) 『嘉吉物語』の成立について

ここで暫くこの問題を措き、『嘉吉物語』の成立問題について触れたい。但し、その詳しい考察は別稿を用意するので、本稿の論旨にかかわる点のみを記す。既に瞥見した鶴舞図書館蔵『赤松家嘉吉乱記』の巻末に、「此記者其時書写山ニテ誌置故如斯世伝フ」の識語がある。また、その後に丁変りで、次の話が収められている。

永享十一年満祐息女歳十六歳時將軍義教公ニ仕フテ近辺に伺ス或時將軍密ニ満祐カ領国ヲ削取テ貞村ニ賜ヘキノ内談評定アリ彼息女一間隔テ聞之其悲ミ父満祐ヘ玉章ヲ調欲^レ送シテ懷中ス其文曰世ノ中ハ剣ノハヲ亘ルカ如シト思召候ヘ父入道殿ヘト書ケリ何トカシタリケン此文ヲ公辺ニ落ス將軍御覧シテ彼女女ニ向ヒ短刀ヲ拔テ剣ノハヲ亘ルトハ如何剣ノハ亘ラル、物ナラハ可^レ亘トノ仰也息女赤面シ頓テ飛懸テ其刀ヲ奪取自害シテ失ニケリ性具入道是ヲ聞テ悲ミ息女ノ同身寸ノ千手観音ノ像ヲ彫彫シテ書写山岡本房ニ安置ス是ヨリ弥謀叛盛シテ怨心腹ニ微シケルトヤ

この話は書写山田教寺十妙院の本尊千手観音の由緒と同一話であり、恐らく鶴舞本の筆者がそれを書下し文に改変したものであろう。その由緒は田教寺所蔵の『寺院所有物明細帳』に収められている。田教寺の御厚意により調査したところ、それは明治三四年天台宗憲章に則って調査された時の文書で、大僧都東谷実坊以下の七名が監察署名捺印した信用に足るものであった。その由緒書は、『寛保三年癸亥初冬十妙院当主実眠^テ修繕^シ旧記^ヲ以^テ伝^フ于^ニ後葉^ニ云^ル』の結語を有している。ここに記された寛保三年（一七四三）の時点で補修を施さなければならなかった「旧記」という内容から、そこに収められた伝承も相当に古いものであると考えられる。固より由緒縁起の類であるから、細部に渡っては幾らかの粉飾はあるだろう。しかし、諸書と照し合せてみる時、如上の伝承は大筋において真実を伝えたものと思われる。例えば、史料編纂所蔵赤松豊右衛門蔵本写『赤松系図』によれば、満祐には教康以外に女子一人があり、「將軍義教後妃」であつたという（教康の上位に書かれているので姉かと思われるが、しかし永享十一年に一六歳であつたとすると、教康よりも年下ということになる。さらに検討を要しよう。なお、他の系図では満祐の子は教康一人である）。また、資料的価値は劣るが、『南方紀伝』によると、永享四年柳営の侍女三人が罪あつて死を命ぜられた事件があつたが、その中に満祐の妹がいた。このため満祐が乱を起すと讒言され、一騒動の後、満祐は赦されたという（『今川記』にも同内容の記事がある）。その他、『管見記』によると、永享一〇年七月一三日義教は侍女を殺しているし、また『公名公記』によると、同年三月義教によつて赤松家人依藤（『公記』は「頼藤」とするが誤り）以下四名が湯起請にかけられ、そのうち三名は切腹して果てるという事件が起つている。当時、義教と満祐の対立は傍目にも明らかで、例えば『看聞御記』永享九年二月九日の条、「履薄氷之儀恐怖千万、世上も有物言、赤松身上云々、播州作州可被借召之由被仰云々」、『公名公記』永享一二年六月二一日の条、「謳歌云、世上物云、赤松入道身上云々、如何々々」などにその實際を知ることができる（『公名公記』は内閣文庫蔵一六二函九一号本による）。このように当時の状況を眺めると、千手観音

の由緒書きに示された状況と、相当に似通っていることが判明するのである。勿論、満祐の娘（もしくは妹）が殺害されたことが嘉吉の乱の直接的原因であったとは考え難いが、しかしそれらの事件が義教の赤松嫡流家に対する圧政の現われと受取られ、乱を誘発した遠因となったであろうことは否めない。

そうしてみると、千手観音の由緒書きは、かなり信憑性のあるものということになってくる。この結果、『赤松嘉

吉乱記』が書写山で書かれ、それが伝承されたという識号もまた信憑性を帯びたものとはいえないだろうか（『赤松嘉

吉乱記』は、既述したように『赤松盛衰記』所収「赤松満祐嘉吉之乱」と同じものであった。この『赤松盛衰記』に収載され

た諸話やその他の赤松家関係のものが多く書写山に伝えられたものであることは、上述のことを傍証するものである（この『赤松嘉吉乱記』、すなわち第一部で『嘉吉之記』として纏めた一書が書写山において成立したということとは、

『嘉吉物語』の古態性追究にどのような手懸りを与えるのであろうか。

永延二年（九八八）性空上人によって開山された播磨の書写山円教寺は、数度の御幸を仰いだ名刹である。赤松氏は播磨を本領としていた関係上、円教寺の有力な檀徒であった。そのことは残存する円教寺文書の中に寄進状などの出であったという（書写山円教寺長吏記）が、快純のような高僧ではなくとも、下級僧の中には赤松氏の関係者がかなりいたものと想像される。このように赤松氏と緊密に結び付いていた書写山において、しかも鶴舞本の識語によれば乱からさ程隔っていない時点で『嘉吉之記』が書かれたということは、その内容が史実に密着した確かなものであることを意味するであろう。事実、『嘉吉之記』を見ると、一二三頁に引いた高坂氏の指摘を俟つまでもなく、表記の点からいっても「彦次郎教康」「左馬助則繁」のように、当時の一等資料と合致している。また、『嘉吉之記』は左馬助則繁の行方について、「満祐舍弟左馬助ハ筑紫へ通行朝鮮へ渡海シて文安五年令皈朝赤松家建立之依有志被誅其頸京都ニ

伝」と記している（史料編纂所本による。鶴舞本や『赤松盛衰記』は同内容だが、則繁が誅された所を「筑紫ニテ」とし、その時を「八月ノ比ノ由ニ伝フ」としている）が、これは史料的にも確められる記事である。まず、『建内記』嘉吉三年（一四四三）六月二三日の条に、「高麗国朝貢使来朝、先日参室町殿奉拝云々、伝聞赤松左馬助故満祐法師弟也謀叛人也去々年没落播州、不知行方之处、菊池被相憑、越于高麗国、打取一ヶ国及難儀之由、今度高麗人歎申云々、仍可被退治之由有沙汰云々」（大日本古記録）とあり、次いで『宗氏世系私記』などの記事によれば、文安五年（一四四八）一月則繁は筑前の守護少貳氏とともに肥前に上陸し、大内氏と戦ったが敗れ、播磨に逃れたとあり、そして『東寺執行日記』同年八月八日の条に、「赤松故夫人道弟左馬允頸、内者ニ紺笠左京亮広世ノ六郎右衛門討手人頭、自河内国タイマ寺上洛。打手ハ細川讃州内ニハ打之」とある（内閣文庫蔵本による。カッコ内は『後鑑』記事）。これらの記事によつて、『嘉吉之記』が史実に密着した作品であることが知られるであろう（但し、左馬助が誅戮された地を鶴舞本は「筑紫」とし、『嘉吉物語』は諸本「河内国太子」とする。これは前引『東寺執行日記』によつて、「河内国タイマ寺」であることが知られ、『嘉吉物語』の史実性の高さが知られる）。

(3) 『嘉吉物語』の古態本

ここで再び『嘉吉物語』の古態性追究の問題へ帰ることにしよう。各類本を『嘉吉之記』と比べてみると、第一類本と第二類本とがよくこれに符合し、第三類本はやや後退している。特に先に問題とした人名や年号について見ると、表(3)の(i)から(v)までのうちで『嘉吉之記』と大略符合するのは、第一類本である。また、(v)の「松浦」とした人物は左馬助が播磨から落下る時に頼った人物であるが、『嘉吉之記』はこれを記さず、第一類本・第二類本は「松浦」とし、第三類本は「松田」としている。先に引用した『建内記』は「菊池」氏、『宗氏世系私記』などは筑前の「少貳」氏としている。この場合、史料的价值からいえば、当然『建内記』の記事を取るべきであろうが、しかしそれが正鵠を射

たものかは疑問が残る。一つには朝鮮使節が果して左馬助が頼った人名までも知っていたかという点(但し、朝鮮使節が訴陳した際に同席した者がそれを菊池氏と知っており、その旨発言したのを書留めたとも考えられる)、二つには菊池氏は代々南朝方の忠臣であり、嘗て北朝方の赤松氏とは干戈を交えた敵対者であったのに、果して赤松氏を受容したかという点などがその疑念である。寧ろ、第一類本や第二類本の「筑紫の松浦」氏の方が妥当ではないだろうか。松浦氏といえ、すぐ肥前の松浦氏を想い出す。確かに肥前の松浦氏は本流ではあったが、しかし当主義は義教の愛顧を被り、嘉吉の乱時には遠隔地であったため赤松氏追討軍に遅参したことを恨み、剃髪して義教の菩提を弔った程である(太田亮『姓氏家系大辞典』の「松浦氏」の項)。よもや乱の中心人物であった則繁を、庇護することはなかったであろう。やはりこれは支流であった「筑紫の松浦」氏でなければならない。なお、第三類本は「筑紫の松田」氏とするが、当時の記録でその名を見出せるのは大体「備前の松田氏」であり、これは静嘉堂本に付された中山信名の頭注のように、「筑紫松田氏未聞」とすべきであろう。これにより、(二)の氏名としては第一類本・第二類本が本来的なものであり、第三類本は「松浦(まつら)」を「松田(まつた)」と誤ったものと思われる。

続いて(ト)の年号を検討してみたい。この年号については、『赤松略記』や『嘉吉乱記』の典拠を求めた時に少しく触れた。それは表(3)の(ト)に見るように、第一類本が「文和三年」、第二類本が「文和二年六月」、第三類本が「徳応(勸応・暦応)三年」である。第一類本や第二類本にはミセケチなどがないところから、「文安」の年号に何の疑問も挟まなかったことが知られるが、第三類本は初め「徳応」であったものが、ミセケチや書入れによつてさまざまに改変された(静嘉堂本では「徳応」の右横に「応安」と書込まれている。色川三中書入れか)。これにより各書写者や校訂者が、第三類本の年号に疑問を抱いていたことが知られるのである。ところで、『嘉吉之記』を見ると、巻初めにこれとよく似た事件が記されている。その事件の前後には元弘の乱と明徳の乱における赤松氏の勲功が配されており、これ

は『嘉吉物語』の構成と全く同じである。このことから『嘉吉之記』に記された事件と『嘉吉物語』のその事件とは、同一であろうと推定される。今、『嘉吉之記』のそれを一部分引用すると、「山名右衛門佐南方官軍和田楠赤松彈正少弼氏範佐山秋山為先三千余騎都合其勢一万五千文和二年二月四日神南備之陣押寄閑吐作切懸（以下、赤松氏の奮戦が語られる）」のようになる。この事件については高坂氏の前掲書に概略が記されており（P・P・89—91）、また安積文書・後藤文書・広峰文書によって、それが史実であったことが証明される（『史料綜覧』。高坂氏の著書には一部文書の写真がある。なお、安積・後藤・広峰の三氏は赤松氏の重臣の家系）。この事件に関しては特に第二類本が酷似しており、逆に第三類本はそれから遊離しているということができよう。これに対して第一類本は「文和三年」と記しているので、第二類本よりやや後退している。しかし、これは酒井本の書写年時が下るところから、初め「二年」であったのを「三年」と誤写した可能性が大である。また、上述した争乱は文和年間を通じて幾度か行われているので、例え「文和三年」であっても一概に誤りとはいえないようである。この結果、年号の問題に関しては、第一類本と第二類本のそれが史実に合致した本来的なものであるということができよう。

ここでこれまで考察してきたところを整理しておきたい。各類本相互間の相違点を見て行くと、第一類本は表記や史実の面でかなり正確なものであることが判明した。また、第二類本は人名表記の点で『嘉吉記』や『応仁記』と同じ誤りを犯しているものの、史実的には正確なものであった。これに対して第三類本は史実から離れて行く傾向を示している。次に文体・表現の面を考察すると、各類本とも語り物的色彩を帯び、赤松家擁護の姿勢が露わであった。その中でも殊に第一類本においてこの傾向が顕著であった。特に記さなかったが、前半部で義教の首を前にした満祐の述懐は、さながら赤松家累代の忠功を宣揚した感がある。一方、鶴舞図書館蔵『赤松家嘉吉乱記』の識語により、『嘉吉之記』という作品が書写山田教寺で成立したことが示唆された。田教寺は赤松氏と深く結び付いており、同寺で『嘉

吉之記』が書かれたということは、その内容も相当に信用の置けるものと想像された。事実、『嘉吉之記』は当時の資料と符合する良質の記録でもあった。この『嘉吉之記』と『嘉吉物語』とは構成・内容の点で通う所が多く、特にその関係は第一類本・第二類本において密接であつた。以上がこれまで考察してきた要点である。

これらの考察から、一つの判断が下せると思う。それは第三類本は他の類本よりも後出性を有する本である、という判断である。というのは、もし仮に第三類本が他の類本より先に成立したとするならば、如上の諸々の相違点を解決する手立ては何一つないからである。これに関連して、一つの数値を示そう。それは第一類本を基に、第二類本・第三類本との異同関係を調べたものである。すなわち、各類本間には上巻で三〇四ヶ所の異文箇所があり、そのうち第一類本と第三類本の間で二八一、第一類本と第三類本の間で二五六、また第二類本と第三類本の間で約六〇ヶ所ある。一方、下巻の方は五四六ヶ所の異文箇所があるが、そのうち第一類本と第二類本の間で五一二、第一類本と第三類本の間で四三六、また第二類本と第三類本の間で九七ヶ所ある(異文箇所算定は、数行に渡つても一、一字違いでも一とした場合がある。なお、上巻・下巻の区分は第一類本によつた。この比率が上巻・下巻でほとんど変らないことから、酒井本の上巻・下巻は、同系統の取合せ本であることが実証されるであろう)。以上のことを総合的に考えると、第三類本は第二類本を典拠としながら、第一類本をも吸収して形成されて行つたものと結論づけられるであろう。では、第一類本と第二類本とは、どちらが先に成立したのであろうか。結論的にいえば、その先後は確言できない。その理由の一つとして、第一類本で現存するのは酒井本のみであり、しかもそれは後世に増補されたと思われる記述を含んでいて、第一類本の本来の姿が確と把握し難いことが挙げられる(先に引用した彦次郎と愛人との別離の場面にも増補が見られる)。しかし、そのことよりも両者が同根に芽生えながら、ある時点より別々に独自の方向を辿つたらしいことが、先後関係を決めかねる最大の理由である。先に見たように、第一類本と第二類本とを比較した場合、

必ずしも一方が正しく他方が悪いという結果は現れなかった。また、両者は内容・構成ともに同じでありながら、なお且つ第一類本はより抒情的で、しかも赤松擁護の主張を強烈に孕んでいた。これに対して第二類本は比較的叙事的な傾向を示していた。このような両本の特徴を勘案する時、両者がある時点から別の方向を辿ったらしいという推考は、自ら生まれくるものである。

四 『嘉吉物語』の形成

ここでこれまで考察してきたところに基き、『嘉吉物語』が如何に形成されてきたかを述べよう。まず、嘉吉の乱の終焉の舞台となったのは、書写山の山麓であった。この時、赤松氏と密接に関っていた書写山が赤松方に味方したことは、容易に想像される。しかし、赤松氏は敗滅し、代わってその地は怨敵山名氏の支配するところとなった。以後、赤松政則によって再興されるまで、赤松氏とその一族は雌伏を余儀なくされるのである（その間に赤松残党による度々の旗上げがあったが、それらについては橋本政次氏の『姫路城史』上巻に詳述されている）。このような赤松氏の盛衰を目の当りに見た書写山は、数度の御幸を仰いだ天台宗の名刹であると同時に、また芸能の徒の育まれていた所でもあった。例えば、覚一本『平家物語』の作者覚一は、中年まで書写山の僧であった（『西海余滴集』）。そして、その平曲は書写山の声明に拠ったものであったという（『西海余滴集・貞徳文集』）。あるいはまた、書写山の音様は、早歌の節と交渉があったらしい（『康富記』応永二九年六月五日の条）。一方、播磨が平曲発祥の地という伝承が、当時琵琶法師の間に伝承されていた（『臥雲日件録』文安五年八月一九日の条）。これらの伝承を踏まえて、富倉徳次郎氏は、「播磨の地に盲人の団体があって、その中心に書写山信仰を置くことは許される推定と思ふのである。筆者は覚一の出自を書写山の僧上りとするだけでなく、初期平曲の歴史の上に、播磨の琵琶法師が意外に大きな交渉を持つてゐると思へてならないのである」と述べている（『明石覚一をめぐって』、『国語国文』昭和二七年一〇月）。また、古説経『山椒

太夫』を見ると、厨子王丸を匿った国分寺の聖が、「七歳の時に播磨の書写山へ上り」御経を修行した旨を述べているが、これも書写山が唱導と深く関ったことを示唆するものといえよう（山本吉左右氏は、東洋文庫『説経節』〔平凡社刊〕の注で、書写山は「唱導と深い関係のある寺である」と述べている）。このような芸能的雰囲気は寺院全体に充滿していたようで、書写山の最高位である歴代の長史の大多数に、「音曲能読」とか「琵琶上手」のような注記が付されている（書写山田教寺長吏記）。このような状況にあった書写山に縁故を頼って赤松氏の残党が這入り込んだことは、無理なく想像されるところである。かくして、書写山内において赤松氏関係者と芸能の徒が邂逅した。そして、まず残された記録や実際の見聞を基に、嘉吉の乱をめぐる記録的な軍記物語が成立した。先に見た『嘉吉之記』のような作品を想定していいだろう。後は時の流れに従って、発展成長して行ったものと思われる。そして、その初期の段階で第一類本と第二類本が生み出されたものである。すなわち、第一類本には主殺しという払拭し難い暗部を持った赤松氏一族の、悲痛な叫び声が響いている。そこには赤松氏が將軍を殺さねばならなかった必然性が語られ、敵対者に対する憎悪が吐露されているのである。しかも、その文体は語り物的口吻を帯びていた。これは語り物文芸を創作しようとしたというよりも、作者が拠って立った文学的基盤が、唱導のような語り物を基盤としていたために生じた必然的な結果であったと思われる。これに対して第二類本は原態本の記録的傾向を継承しつつ、第一類本と同様に赤松擁護の姿勢と語り物的色合いを濃くして行ったもののようである。これが第三類本に至ると、原作者が苦心して創始した赤松擁護の姿勢をやや後退させることになった。既述したことが、第三類本に至って敵対者である山名氏にも赤松氏と同様に敬語を用いるようになったことは、そのことを物語るものであろう。そして、江戸期になると、寛文九年刊『嘉吉軍記』や恐らくは万治頃成立したと思われる『赤松略記』に見られるように、主君殺しの赤松氏に対する批判的言辞が垣間見られるようになる。そのよい例が、東京教育大学図書館蔵本に付された伊勢貞丈の跋文であ

ろう（書誌の項〔八〕の⑪参照）。「赤松か如きは人面獸心といふべし」などの悪罵に、その極致を見る思いがする。

以上が諸本の考察を通して把えた『嘉吉物語』の形成過程である。最終的には第一類本と第二類本の先後関係を決めかねたが、しかし両者は同じ母胎に生まれ、途中から別途の方向に進んだ後も、糾える縄のような関係を持っていたようである。とすれば、あるいは両本間には初めから先後関係などなかったのかも知れない。ただ、煩を避けて一は挙げなかったが、第一類本の方に古態的と思われるもの（史実密着・文章の首尾一貫など）が、より多く存しているとはいえるであろう（例えば、第一類本を除く諸本の末文は、一二八頁に見るとおりである。その中に「比物語を見きかん人は真実のおもひをなして奉公を仕るへし」の一句があるが、第一類本にはない。このような教訓的語句は中世小説や説経節などに見受けられるものであるが、それらのうちでも初期のものには比較的少ない。『嘉吉物語』に即していえば、明らかに叙述を中断するものであり、後に挿入されたものであろう。この部分、第一類本が古態的である）。

以上に述べたところから知られるように、『嘉吉物語』はその成立当初から敗者赤松氏側に立つて叙述された「私軍記」であった。そして、暗い運命を担った赤松氏を擁護しようとしたその姿勢が、『嘉吉物語』に文学的感興を賦与すると同時に、また文学的成熟度を奪ったものであった。室町軍記が内包する宿命といえよう。

付・『嘉吉物語』書名考

最後に『嘉吉物語』の書名について付記しておきたい。現存諸本に冠された書名を列举すると、嘉吉記・赤松物語・嘉吉物語・嘉吉軍記・嘉吉乱記・赤松略記などが挙げられる。このうち書写年時の古い本は「嘉吉記」か「赤松物語」の何れかであり、「嘉吉物語」の書名は統群書類従本に至って初めて現れてくる。その統群書類従原本の「嘉吉物語」

という書名は、書誌の項で触れたように、中山信名の書入れであった。ところが、静嘉堂本に付された信名の文化七年の奥書を見ると、「右嘉吉物語原本無題号（中略）故私加題名謂尔」のように記されている。一方、既述したように、続類従本と静嘉堂本とは兄弟関係にあった。これらの点を併せ考えると、「嘉吉物語」とは文化七年頃、中山信名が付した書名であったということになる。第一類本・第二類本の書名が「嘉吉記」であり、これよりも先に成立したと思われる本が史料編纂所蔵本のように「嘉吉之記」であるところから、恐らく当初は「嘉吉記」であったものであろう。それが「赤松物語」や「嘉吉軍記」などの書名を生み、遂には「嘉吉物語」となったと思われる。

しかし、初名はどうあれ、続群書類従や改定史籍集覧に「嘉吉物語」の名で収載されたため、今日ではその書名で人口に膾炙している。一方、初名と思われる「嘉吉記」は、群書類従巻三七四に同名異種の作品が収められて紛しいこと、また内容的に「記」よりも「物語」の方がふさわしいことなどから、後世の命名であったにせよ、本稿では「嘉吉物語」と呼称した。

〔付記〕 本稿執筆に際し、井上宗雄先生より種々御指導を賜った。記して感謝申し上げる。